



# 神戸市シルバーカレッジ

国際交流・協カコース 22 期

## グループ学習報告書

# Jazz City Kobe

にっちもさっちモ



山下邦彦

藤田昌史 船山宣子

多田昭郎 養田憲一 三宅由美子 高橋洋一

田中洋子 小西康子 佐瀬恵子

～ 目 次 ～

1. はじめに	
2. ジャズはニューオーリンズから始まった	
(1) ジャズ発祥の背景と誕生	1
(2) ニューオーリンズ出身の著名なミュージシャン	4
(3) 全米への普及	7
(4) ジャズのジャンルとその変遷	9
(5) フィールドワーク：ニューオーリンズ	10
3. 日本のジャズ史	
(1) 日本へのジャズ上陸	11
(2) 戦前日本のジャズ	16
(3) 戦後日本のジャズ	18
(4) 上海	19
① 上海帰り	
② フィールドワーク：上海	
4. 神戸のジャズ	
(1) 神戸のジャズ史	20
(2) 海外とのジャズ交流	23
(3) 他都市のジャズイベント	24
(4) ジャズの街～神戸	26
(5) 提言	26
5. おわりに	27
資料	
① ジャズ年表	28
② フィールドワーク一覧表	29
参考文献	30

## 1. はじめに

神戸は、1868年1月1日の開港以来、今年（2017）で150年の節目を迎えた。港を通して諸外国との交流が始まり、モダンでハイセンスな街として栄えてきた。神戸発で様々な文化が、日本中に広がって行った。ジャズもそのひとつと言われている。

ジャズは、米国で生まれ、100年以上の歴史があり、世界中の国々の文化に同化し、脈々と言葉や人種の壁を越えて、今や多くの人たちに愛されている。ジャズを聴くと、なんとなく心がウキウキし、自然に踊りだしたり、時にはノスタルジックになる。ジャズが生まれた背景は？ジャズとは何か？何が人を魅了するのか？ジャズについて学び、神戸のジャズを盛り上げていけると、ジャズに興味のある仲間が集まった。各地のジャズイベント、ジャズクラブのライブ等、フィールドワークを主体として、ジャズの魅力を体感し、全員で楽しみながら学習することにした。

ジャズの誕生とその時代背景、ジャズの音楽的特性と変遷、日本へのジャズ上陸、神戸のジャズについて調査・学習を行った。

学習の進め方として、フィールドワークに加えて、諸文献による調査、さらには、ジャズの発展・普及に尽力されている関係者からのヒアリング等を行った。最後に、神戸のジャズについて、ささやかな提言を行っている。ジャズを通して、国際都市神戸の活性化へ少しでも貢献できれば幸いと考えている。

提言①：電車の発車音をジャズに

提言②：ジャズミュージアムの設置



写真 1-1 神戸開港 150 周年ポスター

## 2. ジャズはニューオーリンズから始まった

### (1) ジャズ発祥の背景と誕生

ジャズはいつ、どこで始まり、どのように現在のよう形になったのか。そのきっかけを作ったのは、アフリカとヨーロッパというまったく毛色のちがう異文化の出会いであった。

1619年にオランダの軍船が初めて20人の奴隷を連れてきた。その後1808年の奴隷輸入全面禁止まで続いた奴隷貿易で、数千万人を超えるアフリカ人が南北アメリカに送りこまれた。その間ニューオーリンズ（New Orleans）は米国一の貿易港として繁栄していった。アメリカ南部は特に、たばこや綿花の栽培に適した土地であり、大農場（プランテーション）に多くの人手が必要だった。アフリカ系アメリカ人（黒人<sup>注1</sup>）はこの農場の働き手として遠く西アフリカから連れてこられた。ヨーロッパからの植民者は家族ぐるみあるいは近隣の仲間達と一緒にアメリカにやってきた。そして音楽をふくめてヨーロッパの生活スタイルをかなりそのままの形で持ち込んだのである。彼らの音楽はヨーロッパの西洋オペラで、ジャズが生まれる前はこれが音楽であった。オペラハウスは1830年にはニューオーリンズに3軒も存在し、この時期は音楽教育が盛んで、楽器は安定的に入手できた（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」<sup>注2</sup> 2017）。

一方、アフリカ出身の奴隷達は違う音楽を持っていた。ほとんどの農場主は奴隷に文化があると

は思わず、昼間ちゃんと仕事をこなささえすれば文句はなかった。深夜の外出や集会は比較的自由で、ちょっと離れた森の奥まで出かけて行ってドンチャン騒ぎをやったり、秘密の祈祷や礼拝をしたりということもあった。そうした奴隷居住区共同体の暮らしを通して、黒人独自の音楽言語が芽生えた。それが、のちに「ブルース (Blues) <sup>注3</sup>」と呼ばれるようになる音楽である。19世紀後半、とくにアメリカ南部の黒人たちの間で創造された非常に素朴な民族音楽である。ワークソングの場合は、リーダーが音頭を取って、複数の人々がそれに答える形で進行していく。一方、ブルースは、全く自分自身の為の歌、自分の心に歌いかける、内省的で孤独な歌である（本多俊夫「ジャズ JAZZ」1976）。

おしひしがれた奴隷生活の悲しみを、楽器を弾きながら歌うブルースは、急速に南部一帯に広まっていった。奴隷制度のアメリカでも特定の主人を持たない奴隷や逃亡奴隷が、ギターやバンジョーを持ってプランテーションを渡り歩き、黒人の間で歌い継がれていった。また、フランス植民地時代は日曜日が休日とされ、奴隷たちは家庭菜園の野菜を町で売り、コンゴ広場 (Congo Square) <sup>注4</sup>などに集まって打楽器などでアフリカの音楽やダンスを楽しんだ（相倉久人「ジャズの歴史」2007）。

1803年、ニューオーリンズはフランスからアメリカに売られたが、アメリカは奴隷たちの休日の集まりが気に入らず、コンゴ広場だけを許可した。アフリカの音楽は楽譜のよなものはないし、西洋音楽のように始めや終わり等、構成的なものはないので、奴隷たちは楽器を長時間演奏できた（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」2017）

奴隷と白人のほかに、クレオール (Creole) <sup>注5</sup>と呼ばれる混血の人々がいた。南北戦争 (1861-1865) が北軍の勝利で終わり、リンカーン (Abraham Lincoln) の「奴隷解放令」が出されて、黒人奴隷は自由になり、その反対にクレオールは白人の扱いを受けなくなった。その結果、次第に没落していく過程でクレオールの人々が黒人社会に入り込んでいくことになった。黒人たちが奏でる音楽や歌にクレオールたちが身につけた西洋音楽の要素が自然に溶け込んでいくことになった。そして、それまではピアノという楽器に触れる機会がなかった黒人たちが次第にピアノを手に入れ、弾きこなすようになって生まれたのがラグ・タイム (Rag Time) <sup>注6</sup>である。そのリズムは、アフリカ、西インド諸島とワークソング、教会の霊歌等が交ざりあった、独特の活気のあるピアノスタイルであった（相倉久人「ジャズの歴史」2007）。

南北戦争前の1853年、南部で黄熱病が大流行し、1万人以上が死亡したことから、ニューオーリンズの町では互助会をつくり葬式を行った。フランス領時代が長かったため、習慣的に軍楽隊が行列の先導をした。ブラスバンドを先頭にして行列が毎日のように続き、社会現象ようになっていた。黒人コミュニティーの互助会も、ニューオーリンズの葬式のシステムを取り入れた。1900年ごろには12以上のバンド (楽団) が存在した。ホルネット (トランペット)、トロンボーン、クラリネット、チューバ、肩掛けドラムなどの楽器が黒人でも安価な値段で入手できるようになっていた。西洋音楽であ



写真 2-1 コンゴ広場 (2017年5月「執筆者撮影」)



写真 2-2 葬式パレード  
(相倉久人「ジャズの歴史」P30)

るオペラと自由に演奏されたアフリカ音楽が新しい音楽として一つになった背景がここにあった。ブラスバンドの楽器はどれも唇や指の操作ひとつで音をゆがませたりして、音色や音程をかなり思うように変えられる。それが新しい黒人音楽を創造できた大きな要因であった。アフリカ伝統のバンジョーに手製のドラムやパーカッションを加えて、今までストリートミュージックを楽しんでいた黒人たちが洋楽器にもちかえて、葬式バンド<sup>注7</sup>として町をパレードして歩くというジャズの原型の出現であった（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」 2017）。

前述したようにニューオーリンズは南部一の貿易港だったので、ヨーロッパやカリブ海経由でやってくる輸入物資と、ミシシッピを川下りしてきた生産物の交易の要として繁栄した。当然そこには人が集まって来る。貿易船の船員、乗客、沖仲士などの仕事を求めてやってくる元奴隷や失業者、そして夜の歓楽街に集まる女たちがいた。そうした街の現状を前にして区画整理を思いついた役人がいた。市の助役シドニー・ストーリー（Sidney Story）である。彼は1899年、フランスが宗主国だった頃の余韻が残るフレンチクォーター（French Quarter）<sup>注8</sup>に娼館の経営を容認する区画を設定して公娼制度を編み出した。発案者の名をとってストーリーヴィル（Storyville）と名付けられた一画である。その後、1917年に軍の命令で閉鎖されるまでストーリーヴィルの賑わいは続いたのである。そうした場所には音楽が付きもので、それまで冠婚葬祭として街を練り歩いていたバンドに、新しい働き場、多少は安定した仕事が見つかるようになった。その波及効果で周辺の酒場、ダンスホールなどの仕事が増え、音楽でお金が稼げるようになったのである（相倉久人「ジャズの歴史」2007）。

このような背景の中で、2つの音楽（ブルースとラグ・タイム）が1つになり新しい音楽「ジャズ」が生まれたのであるが、いつ、だれが、どこでジャズを誕生させたかについては、どの文献にも決定的な契機は書かれていない。一部のジャズ関連文献には、「ストーリーヴィルで酒場楽団によって作られた」「葬式バンドによって作られた」「アフリカで作られたものが持ち込まれた」などと書かれているが、それらは全て伝説の域を出ない。Jazz という



Buddy Bolden  
1877-1931

写真 2-3 Buddy Bolden  
（Cradle of Jazz Tour）

音楽 はバディー・ボールデン（Buddy Bolden）<sup>注9</sup>によって、1900年にニューオーリンズで作られた。初代ジャズ王（King of Jazz）と呼ばれた Buddy が、バックタウンのランバート通りとパディード通りの角にある建物（現存せず）の3階で、演奏した曲が“JAZZ”<sup>注10</sup>音楽の最初であると言われている。これまでのブルースとラグ・タイムを新しく一つにし、シンコペーション<sup>注11</sup>を付けて踊れる曲を作ったのである。Buddy がソロを弾きだすと、近所の女性たちが窓から身を乗り出すほどエモーショナルな演奏をしたと言われている（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」 2017）。ジャズ音楽はアメリカ合衆国の歴史の中で、黒人によって創造された誇れるアメリカ文化なのである。

#### 注

1. ここでは、「黒人」という言葉をあえて使用する。「黒人バンド」の代わりに「アフリカ系アメリカ人バンド」や「黒人奴隷」を「アフリカ系アメリカ人奴隷」とするとゴロが良くないし、意味が不明瞭となる。「白人」に対して「黒人」、これは決して差別用語として使用するものではない。
2. フィールドワークとして、ニューオーリンズ旅行（2017年5月）で参加した現地ツアー。ガイドの John McCusker は100年以上の歴史がある地元紙「The Times Picayune」の記者を30年間務めた。曾祖父の代からニューオーリンズに住んでいて、55歳で退職後はジャズ、地域の歴史や文化について研究し、Photo-journalist として本の執筆も行っている。本ツアーは1994年から始め、地元の豊富な資料を基にした調査は根拠のない多くの伝説を否定できる説得性と信頼性を有していると言われている。引用写真は「Cradle of Jazz Tour」パンフレットから。

3. 日本の戦前戦後に流行した、淡谷のり子らによる「別れのブルース」など「〇〇ブルース」シリーズはブルースの本質に全く関係ない、単なる流行歌である。ましてや、社交ダンスのステップの型の一つなどではない。ブルース音階とは、ミ (E) とシ (B) の音が半音下がることで、その半音のズレが“黒人特有の歌の調べ”の特徴である。
4. 日曜日などに、奴隷たちや有色クレオール人たちがここでダンスやコンサートを開催するようになった。この音楽がジャズの原点とされる。1970年代になって、コンゴ・スクエアの周辺が整備され、ルイ・アームストロング・パークとなった。
5. クレオールはフランス系やスペイン系白人と黒人との間に生まれた混血の人々のことで、彼らは当初白人と同等の扱いを受け、音楽教育も含めてヨーロッパの教育を受けていた。
6. Rag とは「不揃い」とか「デコボコ」という意味で、音を小節の中に整然とはめ込まずに、意識的にずらして演奏することである。「シンコペーション」と呼ばれるリズム構成が主体で、音階的には音階が上がる時（アップビート）よりも下がる時（ダウンビート）に拍が強調される。黒人でピアニストのスコット・ジョプリン (Scott Joplin) が有名な演奏家・作曲家であり、「ラグ・タイム王」(King of Ragtime) と呼ばれている。
7. 墓場までの厳肅な葬送行進曲にひきかえ、帰途はすごくスウィングのあるジャズ風に一転して、生きる者の歓喜をたたえた陽気な行進曲 (例：聖者の行進) であった。(油井正一「生きているジャズ史」2016) また、黒人たちが入手した西洋楽器は、「軍隊からのお下がり」というのは伝説で、楽器店などから安価に買うことができた。(John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」2017)
8. ニューオーリンズで最も歴史があり有名な地区。多くの建物は、ニューオーリンズがアメリカ合衆国に属する前のフランス植民地時代やスペイン植民地時代のものである。19世紀後期から20世紀初期の建物も存在する。
9. 1877年ニューオーリンズ生まれの黒人で、最もパワフルなトランペット奏者でもあり、ラグ・タイムをニューオーリンズスタイル (後のジャズ) へと発展させた重要な人物である。1907年に精神病を患い、その後一生を精神病院で過ごし、1931年に死亡した。(John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」2017)
10. この時期はまだ音楽の“Jazz”という名前は存在していない。Jazz という名前は1916年にシカゴで初めて使われるようになる。それまでは西海岸でスポーツ用語として、“Jass”と綴り、元気とか精神力といった意味で使われ、音楽で同様の意味合いから現在の Jazz となったという。(John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」2017)
11. 音楽用語。強拍と弱拍の正常なリズムがずれて、弱拍のところに強いアクセントが置かれること。ジャズでは「シンコペーション」による演奏を原則とする。(百科事典マイペディア)

## (2) ニューオーリンズ出身の著名なミュージシャン

ニューオーリンズでは、当初、コルネット (小型のトランペット) が楽器のヒーローであった。前述したバディー・ボールデン (Buddy Bolden) に始まり、キング・オリバー (Joe King Oliver 1885-1938)、ルイ・アームストロング (Louis Armstrong 1901-1971) へと引き継がれていく。加えて、トロンボーンのキッド・オーリー (Kid Ory 1886-1973)、サクスのシドニー・ベシェ (Sidney Bechet 1898-1959)、ピアノのジェリー・ロール・モートン (Jelly Roll Morton 1890-1941)、ODJB (Original Dixieland Jazz Band) たちが黎明期のジャズ発展に中心的な役割を果たした。



写真 2-4 King Oliver  
(Cradle of Jazz Tour)

### ① キング・オリバー (Joe King Oliver 1885-1938)

コルネット奏者、作曲家、そしてバンドリーダーでもあった。King は早い時期から音楽をやっていたが、独自のスタイルが出せず長い間苦勞した。1918年にやっと Kid Ory のバンドに入れてもらった。King のメロディーラインをソロで吹くスタイルがルイ・アームストロング (Louis) などへ影響を与えた。Louis は私生児だったので、King を父と慕った。1918年にシカゴにいた King は、「クレオール・ジャズバンド」を作り、Louis を呼んだ。1923年に作った「Dippermouth Blues」という曲は、ジャズを芸術としてのレベルへ引き上げたと言われている (John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」2017)。



写真 2-5 Kid Ory  
(Cradle of Jazz Tour)

### ② キッド・オーリー (Kid Ory 1886-1973)

白人の父とクレ奥ールの母の子として生まれた。異人種間の結婚だった。トロンボーン奏者、作曲家であった。幼少のころから葉巻と釣り針の糸で楽器を

作って遊んでいた。17歳でトロンボーンを手にし、Buddy Bolden に弟子入りした。近所にはラリーシールという白人のクラリネット奏者（後に ODJB のメンバーとなる）がいた。薬の取引がある危険な地域だった。Louis を見染めたのが Kid で、Louis と同世代の若者達をジャズマンに育てた。1922年にニューオーリンズ黒人ジャズバンドとして始めてレコーディングをした。西海岸やシカゴで活躍後、1920年代後半には、古いニューオーリンズ・ジャズは落ち目になっていったので、全米を回ることになる。1930年代のニューオーリンズは廃れた町となったが、帰郷した Kid は、そこで鉄道の清掃員をしながら作曲活動を続けた（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」 2017）。

### ③ シドニー・ベシエ (Sidney Bechet 1898-1959)

クレオールとして生まれる。クラリネット、サクソ奏者であった。10歳の頃からコルネットを吹いていた。ある日、母親がガーデンパーティーでバンドを呼んだが、クラリネット奏者が来られなくなった。家の中でクラリネットを上手に吹く音をバンド仲間が聞き、Bechet はクラリネットの代役を見事にこなしたという。1916年に欧州へ行く頃はニューオーリンズでもトップクラスのミュージシャンになっていた。1916年に床屋で4人の子供たちがコルネットでコーラスを歌っていた。その中の1人が Louis 少年だった。Bechet は気に入り、家に来いと言ったところ、Louis は靴が無くて行けないと言ったので、靴代として1\$を渡した。ところが、Louis は行かなかった。彼の忘れっぽさを示す逸話である（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」 2017）。



写真 2-6 Sidney Bechet  
(Cradle of Jazz Tour)

### ④ ジェリー・ロール・モートン (Jelly Roll Morton 1890-1941)

ピアニスト、バンドリーダー、そしてトップクラスの作曲家でもあった。ダウントウンでクレオールとして生まれ、フランスオペラやアフリカ音楽の両方を聞いて育った。家族はプロの音楽家にさせたくて、楽器を与え、音楽のレッスンをさせていた。17歳の時、ストーリーヴィルで仕事をしていたので勘当させられ、名付け親の所で過ごした。ストーリーヴィルでブルースを知るきっかけを作り、初めてブルースを作曲した。1912年には町を出て北米の街を広く旅した。1917～1922年はロサンゼルスに住み、数々の有名な曲を作った。1923年に新たなキャリアを求めてシカゴに移った。1926年には自身初のバンドである「ホット・レッド・ペパーズ」を組織し、洗練されたスタイルでスイングの激しいセクシーなダンス曲をレコーディングした。Morton の親や祖父母の世代の古いオペラではなく、若者が楽しめる音楽を志向したことで、ジャズが全米に大きく広がったのである（John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」 2017）。



写真 2-7 J. R. Morton  
(Cradle of Jazz Tour)

### ⑤ ルイ・アームストロング (Louis Armstrong 1901-1971)

Louis はサッチモ (Satchmo) <sup>注12</sup> という愛称で知られる 20世紀を代表するジャズ・ミュージシャンである。ニューオーリンズからミシシッピの流れを遡っていった一人の若者が、ジャズという新しい音楽を携えて世界へ羽ばたいたのである。ここでは、ジャズにとってかけがえのない恩人であるサッチモについて、より詳しく解説する。

Louis は、1901年8月4日、ダウントウンの黒人の貧しい家庭に私生児として生まれた。少年期に Karnofsky (ユダヤ人) という人の店で手伝いをしていた。この店は洋服店や小物商など手広く商売をしており、Louis は使い走りをしていて、12人の子供がいて、親が就寝前に原語で歌う子守唄の

意味が分からない。しかし、心を込めて歌う気持ちが養われ、意味の分からない言葉で気持ちを表す“スキヤット”を会得できたという。11歳の時、爆竹の鳴る大晦日の祭りで、浮かれて母親のボーイフレンドのピストルを持ち出し、誤って発砲して更生施設に送られた。そこのブラスバンドでコルネットを習ったのが楽器との最初の出会いであった。退所後、町のパレードなどで演奏するようになり、人気者となる。その頃、ニューオーリンズで、最もホットで最高といわれたバンドのリーダーであり、コルネットの名手でもあった King Oliver に才能を認められ、地元のバンドやミシシッピ川の遊覧船で演奏することになり腕を磨いていった (John McCusker 「Cradle of Jazz Tour」 2017)。



写真 2-8 Louis Armstrong  
(Cradle of Jazz Tour)

22 才の 1922 年に、当時ジャズ音楽が隆盛を誇っていたシカゴで、すでに活躍していた King に呼ばれ、「キング・オリバー楽団」に入り、セカンドコルネット奏者となった。1924 年にはニューヨークに移り、ビッグバンドの草分け「フレッチャー・ヘンダーソン楽団」に迎えられた。その楽団のサウンドが、Louis の在籍した一年間で根本的に革新された。特に、彼が持ち込んだそれぞれのパートによるソロの即興演奏を曲の中に織り込むという手法は、ジャズの演奏を大きく変えた。リズムを自在に操り、長いソロによるアドリブを入れ、しゃがれた声で演技力たっぷりに、ときにはスキヤットを入れて歌った。今ではあたり前の演奏方法も、当時は非常に斬新であった。

1925 年 11 月 シカゴに戻った Louis は、自分のバンド「ホット・ファイブ (Hot Five)」<sup>注13</sup>を結成し、このグループを率いてジャズ史上に残る活躍をする。「Hot Five」の録音は、全米で空前の大ヒットを記録し、肌の色を問わず若者たちはジャズという新しい音楽に熱狂した。いわゆる“サッチモブーム”を引き起こしたのである。レコード会社とは、どんなミュージシャンを使ってもよく、年に 1 度は好きな曲を好きなように演奏してもよいという契約をした。総じて、当時のニューオーリンズ・ジャズミュージシャンのレコーディングの技術レベルは相当に高かった。



写真 2-9 Hot Five  
(Cradle of Jazz Tour)

1929 年、再びニューヨークに戻った Louis は、ブロードウェイ・ミュージカル「ホット・チョコレート」のオーケストラピットで演奏するようになる。その頃、世界恐慌の広がりとともに、ジャズ・ミュージシャンの廃業が相次いだ。Louis は 1930 年、ロスアンゼルスに移動し ニューコトクラブに出演することとなる。1932 年からは、ロスアンゼルス、シカゴ、ニューオーリンズ、そしてヨーロッパを転々とした。1930 年代後半からは、大スターの道を歩むことになる。歌手や役者としての仕事も増やし、ハワイアンや映画主題歌でさえも、Louis は見事にサッチモの音楽にした。

1947 年、この頃は、ビッグバンドの時代が陰り始め、代わりにコンボ編成の人気が出始めると、Louis も楽団「オールスターズ」を結成する。彼は一年間で 300 以上もの公演をこなすことも多かった。1953 年には、戦後復興に沸く日本でも初公演を行ない、神戸新開地の聚楽館でも演奏した。後半生はエンターテイナーとしての活躍が目立った。ニューヨークを拠点に世界を巡り、1971 年に惜しまれながら生涯を閉じた (油井正一「ジャズの歴史物語」2009)。

## ⑥ ODJB (Original Dixieland Jazz Band)

オリジナル・デキシーランド・ジャズ・バンド<sup>注14</sup> (ODJB) は、ニューオーリンズ生まれのニック・ラロック (Nick LaRocca) を中心として、1916年に結成された白人バンドである。結成後まもなくシカゴに移り、演奏活動を行っていたが、特筆すべきは、1917年にニューヨークで、いわゆる世界最初のジャズのレコーディングを行ったことである。このレコードは大ベストセラーとなり、その後のミュージシャン (ベニー・グッドマンやビッグス・バイダーベックなど) に多かれ少なかれ多大の影響を与えたのである。彼らの曲は、バンド全体にみなぎるドライブ感、エネルギー、そしてリアルタイムでその時代の最先端のバンドからしか出せないオーラが感じられたという。ODJBは1938年まで活動を続けた。ちなみに、Dixieland<sup>注15</sup>はアメリカ南部の総称で、Dixieland JazzとNew Orleans Jazzはジャンルが同じであるが、白人バンドが黒人バンドと区別 (差別) する為に、Dixielandという言葉を使った (油井正一「ジャズの歴史物語」2009)。



写真 2-10 ODJB  
(Cradle of Jazz Tour)

### 注

12. サッチモとは、彼の大きな口が satchel mouth (がま口のような口) というのを記者が聞き違えたとする説や、Such a mouth! (なんて口だ) から来たとする説がある。(沢田俊裕「ジャズのすべて」2007)
13. Hot Fiveのメンバー：キッド・オーリー (トロンボーン)、ジョニー・トッズ (クラリネット)、ジョニー・センシア (バンジョー)、リル・ハーデン・アームストロング (ピアノ、Louis の奥さん)、ルイ・アームストロング (トランペット、ヴォーカル)
14. ODJBが1916年に結成された当初は「Original Dixieland Jass Band」の名であった。1917年にビクターからレコードを出した時、Jass から Jazz へ、「Original Dixieland Jazz Band」と改名した。
15. ニューオーリンズがフランス領時代、10ドル紙幣を“Dix”といたので、この地方を Dixieland と呼んだ。

## (3) 全米への普及

ニューオーリンズで誕生したジャズが全米に広まっていった最も大きな背景は、ストーリーヴィルの閉鎖であった。第一次世界大戦が収束に向かおうとしていた1917年、アメリカは突然大戦への参加に踏み切った。その結果、ニューオーリンズの港湾地区が海軍基地になったため、性病の蔓延を恐れた海軍はストーリーヴィルを閉鎖したのである。最大の働き口を失ったジャズメンの多くは、ミシシッピ川を北上し、最終的には工業化の盛んなシカゴを中心とした五大湖周辺や戦勝気分とバブル景気の街であるニューヨークに落ち着いた。同時に、アメリカ経済全体のなかで、北部の商工業 (繊維産業、鉄鋼業、自動車産業など) の発展につられて、黒人労働者を含む大量の労働人口の移動が起こったのである (相倉久人「ジャズの歴史」2007)。

### ① シカゴ

1918年、第一次世界大戦終結を機にアメリカは政治経済の両面でヨーロッパをしのぎ超大国へと発展し始めた。1920年に禁酒法が発効されたが、シカゴでは、ギャング・スターのアル・カポネ (Al Capone) の台頭で、多くの秘密酒場 (Speak Easy) でジャズ・ミュージシャンは仕事を得ることができた。さらには、それに刺激を受けた白人ジャズメンも集まってきた。シカゴ・ジャズ<sup>注16</sup>は、ニューオーリンズでは使われなかったサクスが登場したり、ソロや即興演奏を取り入れたり、ジャズを著しく成長させたのである。1920年代にジャズが大いに栄えたのは、ギャングの庇護だけではなかった。むしろ、一般大衆の間に広めたのは、ラジオであった。ディスクジョッキー番組も始まり、

安価に作られたジャズ・レコードの音楽が、ラジオ電波を通して、急速に一般家庭へと浸透していったのである。

## ② ニューヨーク

ニューヨークではオーケストラサイズのジャズバンド（ビッグバンド<sup>注17</sup>）が出現し、フレッチャー・ヘンダースン（Fletcher Henderson）やデューク・エリントン（Edward Kennedy "Duke" Ellington）が活躍した。さらには、シカゴから移ってきた Louis の存在も大きい。この時代は、いわゆる“ジャズ・エイジ”と呼ばれ、チャールストンを中心としたダンスの時代であった。1930年代、シカゴからニューヨークにやって来たベニー・グッドマン・オーケストラがラジオの音楽番組で全米の人気を得た。ベニー・グッドマン（Benny Goodman）やトミー・ドーシー（Tommy Dorsey）に代表される、いわゆるビッグバンド・オーケストラの出現は、それまで社会の裏道<sup>注18</sup>を歩き続けたジャズを白人中産階級の家庭にもエンターテインメントとして受け入れることができるようになった。ジャズが大衆化することにより、時代はジャズをダンス音楽から聴いても楽しめる音楽へと変わっていった。「スウィング時代は一夜にして始まった」と言われる。1935年、ロサンゼルスのパロマ・ボール・ルームに出演したベニー・グッドマン・オーケストラは予想以上の大成功をおさめ、ラジオの全国中継も相まって、またたく間に全米へ広がったのである。スウィング王と言われたベニー・グッドマンによる、1937年のニューヨークでのパナマウント劇場のコンサートで、ジャズは国民的音楽となった。スウィング・ジャズがピークを迎えたのは、1938年、ベニー・グッドマンがああクラシック音楽の殿堂カーネギー・ホールで行った初めてのジャズ・コンサート、そして、同年に、ニューヨークでスタートしたグレン・ミラー（Alton Glenn Miller）・オーケストラの登場であった（本多俊夫「ジャズ JAZZ」1976）。

## ③ カンサスシティ

カンサスシティでは、禁酒法の下でも、堂々と酒が飲めて、ナイトクラブやキャバレーが営業を続け、ジャズが素晴らしい発展を遂げた。そこにやってきたのは、かつてラグ・タイムの流行した街で、スウィング・ブームの恩恵にあずかるチャンスが少なかった多くの黒人ミュージシャンであった。その代表的な人物はカウント・ベイシー（William "Count" Basie）であった。カンサスシティ・ジャズの特徴は、ブルースのスピリットに溢れ、ミュージシャン同士がジャズだブルースだと言わず、ジャンルの垣根を越えて一緒に歌い、踊り、軽やかにジャンプする独特のスウィングであった。

アメリカ北東部に加えて、映画産業の発展でハリウッドを抱えた西海岸でも、仕事が増えて、多くのミュージシャンが西へ移動した。第二次世界大戦が始まると、ミュージシャンの軍への招集、ナイトクラブやキャバレーといった仕事場の減少、それに追い打ちをかけるレコード会社に対する音楽家ユニオンのストライキ<sup>注19</sup>などにより、スウィング・ジャズは衰退していった。そして戦後、ニューヨーク・ハーレムのミントズ・プレイ・ハウスやアップタウン・ハウスで行われたジャムセッション<sup>注20</sup>からスタートしたビ・バップ（モダンジャズ）の時代に入っていく。



写真 2-11 Benny Goodman  
(相倉久人「ジャズの歴史」P63)



写真 2-12 Glenn Miller  
(CD Carnegie Hall Concert)



写真 2-13 "Count" Basie  
(CD Basie Swings Standards 2009)



代後半～50年代初期に、ロサンゼルスなどの西海岸で、白人ミュージシャンたちが洗練された演奏、すなわち、クール・ジャズやウエストコースト・ジャズと言われるスタイルが出てきた。1950年代後半からは、白人ジャズに対抗したイーストコースト・ジャズ（ハード・バップ）が盛んになった。1960年代からは、モダンジャズは様々な移り変わりを経て現在に至っている。

#### (5) フィールドワーク：ニューオーリンズ

ジャズ発祥の地であるニューオーリンズで本場のジャズを体感すると同時に、関連するジャズの観光スポットを巡り、ジャズ誕生の背景や著名なミュージシャンの活躍等、ジャズの歴史を調査学習することを目的に、5月下旬、ニューオーリンズ旅行を実施した。渡米前の事前準備として以下の組織・団体に接触を試みた。

- ・NOCCA（ニューオーリンズ音楽・芸術専門学校）：2008年、神戸市とのジャズ交流事業で、当時の担当・太田敏一元神戸市職員の紹介で連絡できたが、長期夏休みのため接触できなかった。
- ・神戸・大阪アメリカ領事館：アメリカ領事館は各州の個別観光情報提供や紹介業務は行えないこと、さらには、日本領事館はルイジアナ州には存在しない事も分かった。
- ・松江市国際観光課：松江市はニューオーリンズ市と姉妹都市である。それは、小泉八雲<sup>注21</sup>が来日（1887年）前、ニューオーリンズに新聞記者として10年間居住していたことによる。交流事業担当者とは接触でき、紹介された日本人通訳を通して現地の「ジャズ歴史ツアー（The Cradle of Jazz Tour）」の存在を知る。更に、日本人ジャズピアニストによる「Palm Court Cafe」でのライブ情報等も入手でき、本場のニューオーリンズ・ジャズを堪能できた。これらは日本のガイドブック等では検索できない貴重な情報であった。

#### ① 日程

- 5月25日 成田発、ダラス経由ニューオーリンズ着、ロイヤル通り・バーボン通り散策
- 5月26日 「ルイ・アームストロング公園」、「ジャズ歴史ツアー」、「Palm Court Cafe」
- 5月27日 「ミシシッピー・ジャズクルーズ」、「ジャズ博物館」、「フレンチマーケット」
- 5月28日 「ストリートカー」、高級住宅街「ガーデン・ディストリクト」、「Preservation Hall」
- 5月29日 ニューオーリンズ発、ダラス経由帰国の途
- 5月30日 成田経由伊丹着

#### ② 参加者：多田、養田、船山、三宅、佐瀬



写真 2-14 夜の Bourbon Street  
(2017年5月「執筆者撮影」)



写真 2-15 ミシシッピーJazz Cruise  
(2017年5月「執筆者撮影」)



写真 2-16 Preservation Hall 入口  
(2017年5月「執筆者撮影」)

### ③ 特記事項：ジャズ歴史ツアー（The Cradle of Jazz Tour）

ジャズ歴史ツアーの概要は、「ジャズ発祥の背景と誕生」の項で概説した。本ツアーは、ジャズ発祥の背景から誕生まで、ニューオーリンズ生まれの代表的なミュージシャンの活躍の話を含め、ニューオーリンズ・ジャズの歴史に関して、関連するサイトや住居などを巡りながらの2時間を超えるかなり詳細な解説(CDによる音楽付、通訳：真野ユミ)であった。それは、非常に新鮮で貴重な情報であり、本レポートでは数多く引用することができた。

### ④ フィールドワークを終えて

南国の太陽がいっぱいのニューオーリンズ、まるで19世紀にタイムスリップしたかのような旧市街地フレンチクォーターの古い街並みを、多くの観光客がライブ、ストリートミュージック、ノスタルジックな通りの散策などを楽しんでいる。人々はお茶やお酒を飲み、ジャズを聴き、時には踊りながら陽気に騒いでいる。まさに街全体がジャズのテーマパークである。ジャズバーやレストランは、夜遅くまで開いているが、治安の悪さはほとんど感じられない。今回の旅行では、懸案のジャズ誕生の歴史を詳しく学習できた。古き良きアメリカと本場のニューオーリンズ・ジャズを体感し、ジャズの神髄に少しは触れることができたと思っている。

注

21. ラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn)が松江に住んだのは1年3ヶ月で、神戸には2年間「ジャパン・クロニクル紙」の新聞記者として暮らしていた。その後、東京へ移る。

## 3. 日本のジャズ史

### (1) 日本へのジャズ上陸

「ニューオーリンズで生まれたジャズが日本に入って来たのは、大正の中頃である」という漠然とした推測以外に、正確にいつ、どんな経路で、誰によって持ち込まれ、どのように受け継がれてきたか…という文献がわが国ではほとんど発表されなかった。その理由としては、当時の風潮としてジャズそのものがまともな音楽とみられなかったため、文化人の間で、「ジャズは正当な音楽ではなく、研究するほどの価値はない」と長い間無視されてきたからである(内田晃一「日本のジャズ史」1976)。

「神戸が日本のジャズ発祥の地である」と一般に言われている。多くの文献によると、「大正12年に井田一郎が日本人初のプロのジャズバンドを作り、神戸オリエンタルホテルでジャズを演奏した」のがジャズの先駆であるとみなしている。一方、関東では「ジャズは横浜から始まった」と言われている。これらの事象やその根拠を調査・学習することが、本テーマを取り上げた動機の一つでもあった。日本のジャズ史、特に、ジャズが上陸し、演奏され始めた事象に関連する諸文献や新聞等を鋭意調査した。

#### ① ハタノ・オーケストラ

明治45年(1912)、東洋音楽学校(現：東京音楽大学)を卒業した波多野福太郎以下5人の青年たちが、東洋汽船のサンフランシスコ行き南方航路(以下総じて「北米航路」)の地洋丸に船のバンドとして乗り込んだ。彼らはアメリカに着くと、当時流行していた様々なタイプの楽譜を買い集め、主にダンス曲を大量に日本に持ち込んだ。彼らの評判が非常に良かったので多く



写真 3-1 ハタノ・オーケストラ  
(大森盛太郎「日本の洋楽」P119)

の日本の客船は次々に楽団（バンド）を乗せるようになり、彼らは船の楽隊（楽士）と呼ばれた。あか抜けたアメリカ帰りの身だしなみと本場のショウ・バンドの土産話を持ち帰った楽士はバンド界のエリートだった（内田晃一「日本のジャズ史」1976）。

大正5年、波多野福太郎が船から降りて、銀座の映画館「金春館」<sup>注22</sup>で演奏を始めた。長年、船の演奏家として、伴奏の選曲や休憩時間の演奏の処理の方法を心得ていたため、活動写真の演奏にもすぐに精通し、音楽愛好家や学生たちの人気をよんだ。福太郎に誘われて金春館で演奏していた前野港造は、サクソに興味を持ち、早速船に乗り、西海岸で自分用のサクソを購入して帰った。「サクソでジャズを演奏したのは日本では自分が最初だ」と前野は言っている（内田晃一「日本のジャズ史」1976）。大正8年、弟の波多野鏐次郎が北米航路から下船したので、共にハタノ・オーケストラを結成して「金春館」で演奏した。ここで、ジャズを演奏したという記録は残っていない。大正10年、横浜鶴見の「花月園」<sup>注23</sup>で、ハタノ・オーケストラは2代目専属バンドとして活躍した。そこで演奏された曲はジャズではなかった（武石みどり「ハタノ・オーケストラの実績と功績」2006）。



写真 3-2 花月園舞踏場全景設計図  
（斎藤美枝「鶴見花月園秘話」）



写真 3-3 花月園舞踏会  
（斎藤美枝「鶴見花月園秘話」）

#### 注

22. 金春館：こんばるかん。大正2年（1913）開業 - 大正12年9月1日 焼失。現在の銀座7丁目にあった活動写真館。無声映画伴奏や休憩音楽として、クラシックやオペラ音楽が演奏された。

23. 花月園：明治末新橋の料亭「花月」の主人だった平岡廣高が、大正3年（1914）に、横浜鶴見に「花月園遊園地」を開園した。第一次大戦後、夫妻で欧州旅行をしたときに妻の静子はたいそう社交ダンスが気に入り、大正6年、社交場としての鶴見花月園舞踏場を作らせた。専属のオーケストラも入れてフォックストロットなどのダンス音楽が演奏された。大正9年、日本初の営業ダンスホール「花月園」が常設された。

## ② 外国人演奏家

太平洋を往復する汽船（北米航路）にはフィリピンの演奏家も乗っていた。寄港するマニラ、香港、上海、神戸、横浜などの大きなホテルで演奏することも多かった。当時、アメリカの統治下にあったマニラでは、明治37年（1904）にいち早くジャズが流入し、フィリピン人演奏家も船の楽士として活躍した。彼らは一時下船時、神戸オリエンタルホテル、横浜グランドホテル、東京帝国ホテルなどでサロン音楽やダンス音楽を演奏した。

大正8年（1919）に、「これや丸」のP.アントニオが率いるフィリピン楽団が、休暇下船時に、神戸オリエンタルホテルでジャズを演奏した。また、神戸に定住したフィリピン演奏家もいて、彼らの多くが日本人女性と国際結婚をしていた。ペペ・マテアス楽団（フィリピン人の5人編成）なども加わって、神戸オリエンタルホテルを基盤にして、大阪のカフェやダンスホールにも進出していった。同じように、大正8年頃の横浜では、横浜グランドホテルや横浜オリエンタルホテルを演奏の場として、マテアス楽団や白系ロシア人のサロン楽団が採用され、ジャズなどの演奏活動をしていた。このように、フィリピン楽士たちは、日本ジャズ音楽の発展に大きく貢献したのである（大森盛太郎「日本の洋楽」1986）。

また、大正9年（1920）、カリフォルニア大学の「グリークラブ・ジャズバンド」が来日し、大阪

中央公会堂でジャズを演奏した（大正9年8月3日付「大阪朝日新聞」）。

### ③ 井田一郎

日本ジャズの先達の最古参として井田一郎の名を忘れることはできない。彼こそは、ジャズ音楽を初めて職業として成立させ、またジャズ発展の努力をした草分けであった。大正から昭和初めにかけての凄まじいばかりの活躍は、そのまま日本ジャズの足跡を物語るものである。

明治27年（1894）、東京浅草で生まれた井田一郎は、三越デパートの前身である三越呉服店が音楽部を設立して管弦楽団「三越少年音楽隊」<sup>注24</sup>を組織すると、16歳で入隊した。ほぼゼロから楽器と楽理を学び、店外で時々行われていた社交ダンスパーティの伴奏を通してダンス音楽に親しんでいった。当時のダンスは、古典舞踊曲が一般であり、奏楽もワルツやワンステップがほとんどであったが、大正の初期になると、徐々にラグ・タイムやフォックストロット<sup>注25</sup>の音楽が入り始めてきた。大正3年（1914）に、上野で万国博覧会が開かれ、三越少年音楽隊は博物館前の奏楽堂で毎日演奏した。既にその中にはラグ・タイムの曲がいくつか入っていた（瀬川昌久「ジャズで踊って」2005）。



写真 3-4 井田一郎  
(津金沢聡広「タカラヅカ・ベルエポックⅡ」P150)

同じ大正3年、既に北米航路を運航していた東洋汽船のほかに、日本郵船も欧州航路に加えてアジアとシアトルを結ぶカナダ航路を開設し、日本人のバンドを船内に採用することになった。井田は、アメリカに行って直にダンス音楽を聴くチャンスをつかむため、日本郵船の鹿島丸に乗り込むと、アメリカから直接フォックストロットの譜面を仕入れ、またちょうどその頃オープンすることが決まった、横浜鶴見の「花月園」に頼まれて楽器の調達もした。大正6年（1917）、「花月園」の社交場がオープンし、楽士の井田一郎は北米航路から持帰ったダンス音楽の楽譜を基に、フォックストロットなどのダンス音楽を演奏した。ちょうどアメリカで「オリジナル・ディキシーランド・ジャズバンド（ODJB）」によって初めて「ジャズ」という言葉が公にされた年であった。井田一郎の花月園でのバンド生活は、バンドの内紛のために3ヶ月で終わりを告げ、大正7年末から東洋汽船の天洋丸に乗り込んだ。サンフランシスコでは、ダンス音楽のレッスンを受け、市内の劇場やホテルのバンドを聴いて廻った。

大正10年船を降りた井田は、ジャズの楽譜を持ち帰り、大正9年に開業した日本初の営業ダンスホール「花月園」の初代専属オーケストラ（宍倉バンド）の一員としてバイオリンを演奏した。ここでジャズが演奏された可能性は高いが、記録は残っていない（瀬川昌久「ジャズで踊って」2005）。

大正11年3月、三越時代からの恩師東儀哲三郎の紹介で、宝塚少女歌劇団のオーケストラに入った。同年12月末に井田は、ジャズに興味をもっている団員7人と「ジャズ研究会」を作り、少女歌劇のショーの合間に初めてジャズを一度だけ演奏した。ところがこれが、他のオーケストラのメンバーをいたく刺激し、ジャズのような非音楽的な演奏をする者と同席できぬという申し出を受けた。このような事情で井田はいたたまれなくなり、大正12年3月に宝塚オーケストラを辞めた<sup>注26</sup>（「タカラヅカ・ベルエポックⅡ」2001）。

その当時大阪のダンスマニアが結成していた踏華クラブというダンスの会があり、井田たちが宝塚を辞めたと聞いて、応援しようと勇気づけてくれた。そこで井田は、一大決心のもとに宝塚と一緒に他3人とともに、大正12年4月、神戸で日本人初のプロのジャズバンド「ラフィング・スターズ」<sup>注27</sup>を結成した。踏華クラブのほか、神戸オリエンタルホテルや神戸ロッター倶楽部等々

のダンスパーティにも出演し、ジャズを演奏した（津金澤聡広「タカラヅカ・ベルエポックⅡ」2001）。井田たちは白いジャケットに黒いズボン、腰にはスペイン風サッシュを巻いてステージに上がった。たいそう粋な演出であった。しかし、このバンドはわずか5カ月で解散した。井田はその後、大正12年8月に道頓堀に松竹座が開場していた「松竹座オーケストラ」に加入した。9月の震災後、井田は鹿島丸で再び渡米している。大正13年4月に東京で、大浜少女歌劇団の指揮者となった。バンドを作ったり潰したり、紆余曲折を経ながら、しかし、ジャズのフィーリングから離れることなく、アレンジを磨き、後進を育てていった。関西に戻った井田は、喫茶からダンスホールに転業した「パウリスタ」に出演し、大正14年に、大阪最大の「ユニオン・ダンスホール」に加入して、6人組の「チェリーランド・ジャズバンド」を結成した。大阪、道頓堀を舞台にして全盛を誇り、日本の「ジャズ・エイジ」の基礎を作っていたのである。



写真3-5 ラフィン・スターズ（津金沢聡広「タカラヅカ・ベルエポックⅡ」P153）

昭和2年の大阪ダンスホール営業禁止令により、昭和3年（1928）に上京した「チェリーランド・ジャズバンド」、及び、そこから独立した5人組の「ニュー・チェリーランド・シンコペイターズ」の面々は、関東でも大活躍し、まさに日本における「ODJB」の役割を果たした。井田は、ジャズを紹介し、ステージから大々的に長期にわたって演奏し、広く大衆への普及に努めた。同時に、ダンスホールや映画にもプロのグループとして出演し、かつレコード吹き込みも行ったという点で、その果たした社会的影響はまさに「ODJB」にも匹敵すべきものである。後半生は、指揮者兼編曲者となり、日本コロムビアが発売したジャズのほとんどを編曲し、服部良一から“ダンスジャズ・アレンジャーの先駆者”と賞賛された。まさに“日本のジャズの父”と呼ばれるにふさわしい。しかし、戦後は米兵相手のリクエスト・バイオリン弾きで糊口をしのぐなど不遇で、晩年は写譜業を営んだ。没年は昭和47年（1972）、78歳であった（瀬川昌久「ジャズで踊って」2005）。

## 注

24. 当時、民間の数少ないオーケストラの中で、三越管弦楽団は、大衆を相手にして演奏するオーケストラとしては、ほとんど唯一の整備されたものであった。（大森盛太郎「日本の洋楽」1986）
25. フォックストロット：1910年に、アメリカのアイリーン Irene Castle とバーノン Vernon C. のキャッスル夫妻が、ジャズを伴奏にして、はじめてヒール(踵)から脚を運ぶ普通の歩き方と同じ自然なスタイルで踊るダンスを〈フォックストロット〉と名づけて発表した。それまでの踊りは、トウ(つま先)から脚を運んでいたが、キャッスル夫妻の始めたこの〈キャッスル・ウォーク〉は、近代社交ダンスの基礎となった。（世界大百科事典 第2版 マイペディア）米国内で大流行したのは1914年頃で、日本に紹介されたのは、大正8年（1919）頃といわれる。
26. 宝塚退団騒動については、井田自身が戦前の娯楽雑誌「バラエティー」（1939年4月号）にいきさつを書き残している。（「タカラヅカ・ベルエポックⅡ」2001、）
27. 主要なメンバーは、岩波桃太郎（ピアノ、サキソフォン）、高見友祥（サキソフォン、ドラム）、山田敬一（サキソフォン、クラリネット）、井田一郎（バイオリン、トランペット、ピアノ）である。マネジメントは、神戸三宮の北尾楽器店が引き受けた。北尾楽器店の主人、北尾はハイカラな人で、井田一郎をひいきにして楽器類を全て提供した。（瀬川昌久「ジャズで踊って」2005）

## ④ ジャズ・レコード&ラジオ放送

大正9年（1920）に初めてジャズのレコードが日本に入ってきた。慶応義塾大学の学生菊池滋彌が国会議員の父の秘書としてワシントンに行き、そこでジャズ音楽に遭遇した。レコードを持ち帰り、銀座の社交クラブ「交詢社」<sup>注28</sup>で再生した。これが、日本における“ジャズ喫茶”の始まりと言わ

れている。

ラジオ放送も始まった。大正13年、東京放送局(JOAK)が設立され、14年には大阪放送局(JOBK)、名古屋放送局(JOCK)が設立された。このように大正末期にすでにラジオは、幅広いコミュニケーションをもつ媒体機関としての発展を始めていた。ジャズが初めてラジオ放送されたのは、大正14年6月、JOAK・NHKで「コペンハーゲン・ジャズ」であった(瀬川昌久「日本のジャズは横浜から始まった」2015)。

注

28. 交詢社：明治13年(1880)に福澤諭吉が提唱し、結成された日本最初の実業家社交クラブ。名称は「知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」に由来する。慶應義塾の同窓会メンバーを中心として、憲法案の発表などの政治活動や各界で活躍する人物紹介などの出版活動を行った。

## ⑤ 神戸外国人居留地

慶応3年12月7日(1868年1月1日)の神戸開港と共に、外国人居留地が開設された。明治3年(1871)、神戸レガッタ&アスレティック倶楽部(KRAC)が結成され、体育館(劇場として使われたときは居留地劇場と呼ばれた)や内外地遊園(現東遊園地)が作られた。明治初期から、アメリカ艦隊楽団、演劇団、プロの音楽家などが定期的に来日し、居留地劇場などで演劇や音楽コンサートが頻繁に行われた。横浜と比較して、神戸の居留地は雑居地を有したことから、神戸市民に開放的であった。神戸市民は西洋音楽に興味を示し、居留地劇場でのコンサート<sup>注29</sup>を聴きに行った。神戸市民主催の演奏会や音楽会も相互に開催され、文化交流が盛んであった(谷岡史絵「神戸居留地における音楽」2001)。

大正初期に、ジャズが居留地で演奏されたという記録は、KRACには残っていない。大戦でKRAC本館や体育館(居留地劇場)が焼失したことも要因であろう。また、大正時代の神戸又新日報、神戸新聞、朝日新聞を調査したが、それらに関する記事は見当たらなかった。しかしながら、神戸居留地で、大正初期に、外国人演奏家によってジャズが演奏された可能性は非常に高いのである。

一方、大正時代における横浜居留地等でのジャズ演奏について、「横浜開港資料館」を調査した。幕末から昭和初期にかけて、25万点近い資料が保管されているが、関東大震災や大戦の空襲で焼失したものも多く、ジャズに関連する資料を見つけることはできなかった。

1900年、ニューオーリンズで発祥したジャズが西海岸に伝わったのが1917年頃である。北米航路を何度も往復した楽士たちが、西海岸でジャズと遭遇し、楽譜や楽器を持ち帰ったのは必然であった。波多野福太郎や井田一郎など、船の楽士だった多くのミュージシャンが、下船後に、ホテルやダンスホールでジャズを演奏したであろうが、明確な記録としては残っていないし、それらが記載された文献は見つけることができなかった。当時、“ジャズ”という言葉自体がメディアにとってあまりポピュラーではなかったという事情もあろう。いち早く、アメリカからフィリピンに上陸したジャズが、フィリピン楽士によって、大正8年頃、下船時に神戸や横浜で演奏されたことは「日本の洋楽」(大森盛太郎・新門出版社・1986)に明記されている。

以上のように、当時の文化事情から、日本のジャズの歴史(発祥)に関する正確な記録は残されておらず、日本で、最初にジャズを演奏した場所や人物の特定は、推測の域を出ない。しかし、北米航路を往復した楽士たちには、日本のジャズの先駆者としての高い歴史的評価が与えられることは明

確である。本レポート巻末の資料①「ジャズ年表」に、米国でのジャズ誕生、日本へのジャズの上陸、そして、ジャズの伝承・発展に貢献した主なミュージシャンたちの活躍などを時系列的にまとめた。

注

29. 明治時代、居留地劇場などでのコンサートには日本人の観客が外国人の3倍はあった（ジャパン・クロニクル紙「神戸外国人居留地」1993）。

## (2) 戦前日本のジャズ

大正時代に、「東の花月園」「西の宝塚」といわれた波多野兄弟や井田一郎らの活躍は既述した。関東大震災（大正12年9月）後、多くのミュージシャン達は大阪へ活動の場を移すことになった。大阪南の難波新地では、バーやカフェだった所がダンスホールに改造され、やがて多くのバンドも登場するようになった。道頓堀川で屋台船<sup>注30</sup>の上でジャズ演奏などがあり、大阪のジャズバンドの黄金時代を迎えたのである。

関東レコード界に地盤を築き始めていた演歌歌手兼作曲家の鳥取春陽<sup>注31</sup>は大阪へ移り、大阪のジャズ熱に刺激を与えた。鳥取は演歌とジャズを融合した曲を作り、その編曲をしていたのが服部良一だった。服部良一は明治40年大阪生まれで、昭和8年に上京し、11年に大手コロネビアレコードの専属作曲家になる。大阪ジャズのサウンドで己の感性を育み、そのフィーリングを大衆音楽の分野において見事に開花させた。

大正14年、二村定一は、外国のジャズソング<sup>注32</sup>（「アラビアの唄」「私の青空」…井田一郎編曲）をニッポノホン（レコード会社）に吹き込み、大ヒットとなった。ジャズシンガーの登場である。昭和初期、二村は一世を風靡する。その後、藤山一郎、ディックミネらのジャズシンガーが登場して活躍した。又、エノケンのジャズ、川田義雄の浪曲ジャズなどのユニークなものもあった。女性では淡谷のり子、ヘレン隅田、川畑文子、ベティ稲田などがいた。

米国のジャズ演奏家の来日による指導も日本人演奏家に刺激を与えた。大正14年、天勝一座<sup>注33</sup>が米国巡業から帰国の際、7人編成の黒人ジャズバンド（カール・シー・ショー・カンパニー）を連れて帰った。帝劇や横浜喜楽座で演奏し、さらに地方巡業を行ったことで、ジャズは一般民衆の間に普及した（瀬川昌久「日本のジャズは横浜から始まった」2015）。

大正天皇の崩御に伴い、大阪のダンスホールは昭和2年で全面禁止になり、ジャズメンや楽士達は大阪から東京へ大移動した。東京八重洲口の「日米ダンスホール」は、日本郵船ビル5階（当時は日米信託ビル）にオープンした。人形町の「ユニオン」は昭和3年に大阪のユニオン系のホールが朝日舞踏場を買収してダンスホールとなった。赤坂溜池の「フロリダ」は数多い戦前のダンスホールの中でもとりわけ豪華な設備を誇っていた。そこには俳優、音楽家、画家、ジャーナリスト等、当時の先端をいく人間が溜まり、日本のジャズ・エイジの発展場となったのである。一方の関西では、阪神国道筋から神戸にかけて新たに多くのダンスホールが林立するが、これについては次項で詳しく述べる。昭和3年、上京した井田一郎の「チェリーランド・ジャズバンド」は、浅草電器館や三越のホールでジャズ



写真 3-6 エノケン・デキシーランダース  
（瀬川昌久「ジャズで踊って」P182）

を演奏して大好評を博した。演奏曲目は当時流行していたダンスナンバーがほとんどであった。ちなみにこの当時、井田の指導を受けてジャズを歌いスターになった一人が、ブルースの女王と言われた淡谷のり子であった。

関西の一流ジャズメン達の熱演に大きな影響を受けたであろう大学生たちの間で、ジャズ音楽に対しての関心が高まっていった。大正 14 年、法政大学では、作間毅や渡辺良らによって、「ラック・アンド・サン」(Luck & Sun 俗に“羅漢さん”)とよばれた大学初のジャズバンドが結成された。同じく大正末期、慶応義塾大学には菊池滋彌<sup>注 34</sup>の 6 人編成のグループがあり、実業家で名高い益田太郎男爵の息子たちと共にジャズの研究をしていた。彼らは「カレッジアンズ・ジャズバンド」と名乗っていた。昭和 2 年に、菊池らは本格的なジャズバンドを作ろうと、大学の校旗にちなんで「レッド・アンド・ブルー・ジャズバンド」を組織した。そのコーチに、紙恭輔があたった。昭和 3 年には、三越ホールで第 1 回のコンサートを開き大成功を収めた。また、生バンドを呼び物にしようとした「フロリダ」などのダンスホールにも数多く出演した。昭和 5 年の秋に「フロリダ」では本場米国のジャズバンド招聘も実現し、昭和のジャズ・エイジの発展場「フロリダ」は外国にも紹介されるようになった。昭和 8 年、「フロリダ」では、プロに転向した菊池が大活躍をし、南里文雄(トランペット)らと共に、「フロリダ・オーケストラ」を率いて、戦前最高のジャズバンドに仕立て上げた。昭和 10 年、ディックミネの「ダイナ」が大ヒットした。そのバックを勤めたのは、昭和 9 年に結成された南里文雄の「ホット・ペッパーズ」だった。このように、カフェ、ダンスホール、そしてホテルで、ジャズやフォックストロットのリズムが鳴り響いたのである。この頃が戦前のジャズのピークであった(大森盛太郎「日本の洋楽」1976)。



写真 3-7 菊池滋彌  
(慶応義塾大学「Editor's Note  
—学友」2012 年 6 月号)

昭和 12 年の日華事変後、次々とダンスホールが閉鎖され、昭和 16 年に太平洋戦争へ突入すると、ジャズ・レコードの発売、演奏禁止と米英国のすべての曲が全面禁止となり、ジャズは敵国音楽、亡国音楽と決めつけられ、演奏も聴くことも禁止された。唯一、NHK 放送で敵の米兵に向け、「謀略放送」の中でジャズ演奏<sup>注 35</sup>が行われた。

## 注

30. 道頓堀一带は高級花街だったので芸者達もその音楽に刺激を受けた。大阪ジャズの創始者といわれる杉田良造が芸者たちに楽器を持たせ、指導して河合サキソフォンバンドという少女音楽団を組織し、屋台船で演奏したりした。
31. 鳥取春陽：(1900 - 1932 年) 大正時代の街頭演歌師。街頭演歌師の立場から洋楽の手法をもって民衆歌謡を創作した。関東大震災後、活動拠点を大阪に移し、歌手兼作曲家として活躍。大正後期、絶頂期を迎えた。昭和に入るとジャズのリズムを演歌に取り入れ斬新な曲を創作した。レコード会社で多くの流行小唄を発表した。特に「浅草小唄」は全国区のヒット曲となり、演歌とジャズのリズムを融合させた「望郷の唄」「浜辺の唄」(原曲・「君を慕いて」)、春陽の内縁の妻山田貞子が歌った「思い直して頂戴な」も関西地方で流行した。
32. ジャズソングという言葉は日本語であり、単に「ジャズ」と呼ぶのが正しい。
33. 女流奇術師松旭齋天勝。明治 44 年、27 歳で独立。座員 100 名を越す奇術芸「天勝一座」の座長。大正 12 年からアメリカ公演、大正 14 年帰国後は帝劇や横浜喜楽座でジャズを演奏した。
34. 菊池滋彌：明治 36 年京橋の生まれ。慶応幼稚舎から慶応大学に進学してピアニスト、学生ジャズバンドのリーダーとして活躍した。初めてレコードを米国から持帰り、再生したことは既に述べた。
35. この演奏者の中に、歌手「森山良子」の父である「森山良」(名トランペット・ジャズ奏者)や「かまやつひろし」の父「ティープ釜范」がいた。

### (3) 戦後日本のジャズ

日本の戦後のジャズは、「進駐軍キャンプ」からスタートした。敗戦直後のバンドマンは戦時中、軍楽隊で鍛えられた人たちが多く、クラシックやマーチで鍛錬された腕をジャズに切り替えて演奏を始めた。当時はレコードや楽譜の入手が困難であり、許可された場所以外で、ジャズを演奏したり、唄うことは禁じられていたので、もっぱらラジオから流れる曲から採譜したり、兵士のジャズマンから入手した。こうして、ジャズを中心とする軽音楽が甦ってきたのである。昭和 20 年 9 月、NHK に米軍軍楽隊が出演し、戦後初のジャズ放送が流された。また、NHK・占領軍用放送ネットワーク「WVTR」（第 2 放送用・FEN の前身）が放送された。そして、ジャズ音楽は、東京を中心に各地の進駐軍キャンプやクラブで盛んに演奏された。日本のジャズバンドも「南里文雄とホット・ペッパーズ」「渡辺弘とスター・ダスターズ」等のバンドが次々と活動し始めた。戦前からポピュラー音楽を歌っていた淡谷のり子、ディックミネ、灰田勝彦らは進駐軍キャンプやクラブで、ジャズ、ブルース、シャンソンなどを歌いまくり、拍手喝采を浴びた。昭和 27 年（1952）、それまで、基地周りをしてきた日本人ジャズバンドは、基地外で演奏しだした。また、駐留軍<sup>注36</sup> キャンプから育っていった、江利チエミ、雪村いずみ、ペギー葉山等が歌謡界で活躍し始めた。これを契機に、戦後の空前のジャズブームが起こったのである。

戦後初の大家ジャズマンの来日も大きな話題であった。昭和 27 年 4 月に、ジーン・クルーパー・トリオ (Gene Krupa Trio) が来日し、日劇や横浜国際劇場で演奏した。翌年 11 月には、ノーマン・グランツ (Norman Granz) 率いる「ジャズ・アット・ザ・フィルハーモニー」が来日し、オープンカーで銀座をパレードした。同年 (1953) 12 月には、サッチモが来日し、各地で公演してジャズブームに拍車をかけた。また、この頃から各地に「ジャズ喫茶」が次々と開店し、テレビ放送が始まり、ジャズ・フェスティバル<sup>注37</sup>も開催され、ジャズファンが急増していった。50 年代は、戦後日本のジャズ<sup>注38</sup>の黎明期といえる。



写真 3-8 ジーン・クルーパー・トリオ  
(吉田衛「横浜ジャズ物語」P67)

こうしたジャズブームの中で、日本でも本格的なモダンジャズが起こっていた。ピアニストの守安祥太郎や秋吉敏子である。昭和 27 年 (1952)、秋吉が結成した「コーギー・カルテット」に渡辺貞夫らが参画し、横浜のクラブでジャムセッションを行うようになった。「ジャズ映画」も更にジャズブームを盛り上げた。「グレン・ミラー物語」「ベニー・グッドマン物語」「五つの銅貨」などが公開された。昭和 32 年 (1957) には、マイルス・デイヴィス (Miles Dewey Davis III) が音楽を担当した「死刑台のエレベーター」が公開され、アート・ブレイキー (Art Blakey) の来日もあってファンキー・ブームとなり、モダンジャズを聴かせる喫茶店も増えた。昭和 33 年 (1958)、ニューポート・ジャズ・フェスティバル<sup>注39</sup>の記録映画「真夏の夜のジャズ」が大ヒットして、ジャズブームは最盛期を迎えたのであった。

この頃アメリカでは、エルビス・プレスリー (Elvis Aron Presley) が現れ、ロカビリー・ブームの絶頂期を迎えるとともに、ジャズの最盛期は終わりに近づいていった。日本でも、昭和 33 年、日劇で「ウェスタン・カーニバル」が盛大に開催され、平尾昌晃、ミッキー・カーチス、山下敬二郎などが派手なパフォーマンスを披露した。ジャズとロックの共存期、そして間もなく訪れるロック全盛時代への変換期でもあった。

注

36. 昭和 27 年 4 月、日米安全保障条約が発効され、それまでの進駐軍（占領軍）は駐留軍となった。米軍基地はそのまま残ったが、規模は縮小された。
37. 日本初のジャズ・フェスティバルは、昭和 52 年（1972）、田園コロシアムで行われた「ライブ・アンダー・ザ・スカイ」で、ハービー・ハンコック、渡辺貞夫、日野皓正らが演奏した。
38. 当時の日本では、ジャズと言われた音楽は軽音楽の総称であり、ジャズはもちろん、タンゴ、ワルツ、ハワイアン、カントリー、シャンソン、ラテンなどのポピュラー音楽、つまりクラシック以外の洋楽を「ジャズ」と言っていた。
39. ニューポート・ジャズ・フェスティバル（Newport Jazz Festival）は、ロードアイランド州ニューポートで毎年 8 月に開かれるジャズ・フェスティバルの草分け的存在である。イベント・プロモーターのジョージ・ウェイン（George Wein）によって、1954 年に始められた。1958 年のフェスティバルの様子は、映画「真夏の夜のジャズ（Jazz on a Summer's Day）」でドキュメント化された。

#### (4) 上海

##### ① 上海帰り

上海租界（居留地）は 100 年の歴史がある。1848 年に米租界が設置された。1900 年にニューオーリンズでジャズが生まれ、西海岸とフィリピン（米の統治下）のマニラを結ぶ北米航路の寄港地である上海租界へのジャズ上陸は遅くはなかった。米のジャズ・ミュージシャンにフィリピンのジャズ演奏者たちが加わって、上海のジャズは高いレベルにあった。そんな中で、上海は日本人のジャズ音楽の修行の場であった。東洋一の国際都市であった上海で、ジャズを学んで帰国したジャズ演奏家を「上海帰り」と呼んだ。もちろん、「上海帰り」は演奏技術に優れ、給料も日本の 2 倍以上はあった。大正 14 年（1925）、日本人経営の第 1 号ダンスホール「ブルー・バード」が上海に誕生した。上海には、日本租界と共同租界（英米仏印など）があった。昭和初期になると、日本租界のダンスホールは、「極東」「桃山」「パビリオン」「エデン」「パラダイス」「イーグル」「ムーン」などが次々に開店した。それらのジャズ音楽は、多くはフィリピンの演奏楽団によって演奏され、上海に来る日本のミュージシャンは、それらの楽団に加わっていた。年次を追い日本人のジャズ楽団も増えて行った。この当時、上海で働くジャズ演奏家の 60%は、フィリピン人ジャズ演奏家が占めていた。サッチモを愛好する南里文雄ら上海へ赴いた人々は、それぞれに大きな収穫を得て帰国し、日本ジャズ音楽の推進力の一つとなった。（大森盛太郎「日本の洋楽」）

##### ② フィールドワーク：上海

10 月中旬、上海のジャズを体感すべく、フィールドワークを実施した。ちょうど「上海ジャズ・フェスティバル」が行われていたが、雨天の為中止となり、大規模フェスティバルを見ることはできなかった。しかし、旧租界にある和平ホテルの有名な「Old Jazz Band」や旧フランス租界にある「Cigar Jazz Wine Bar」などのライブを堪能するこ



写真 3-9 昭和初期の上海租界  
(和平ホテルロビー 2017 年 10 月「執筆者撮影」)



写真 3-10 現在の旧上海租界  
(2017 年 10 月「執筆者撮影」)



写真 3-11 和平ホテル「Old Jazz Band」  
(2017 年 10 月「執筆者撮影」)

とができた。旧租界の建築物はほぼ当時のままであり、現代との違和感は全くない。

#### 4. 神戸のジャズ

##### (1) 神戸のジャズ史

大正12年(1923)、井田一郎が日本初のジャズバンドを率いて、神戸オリエンタルホテルでジャズを演奏したことは既に述べた。その後、神戸には、関東大震災で焼け出された東京・横浜の外国人商社マン等が移り住み、神戸のダンスホールは多くの人々が加わって繁盛した。関西の貿易の中心であった神戸では、古くからダンスホールが維持されてきた。神戸は、大正8年ごろから神戸オリエンタルホテルのフィリピン人ジャズ演奏家を中心としたジャズ音楽の発展があった。昭和2年(1927)、大阪市がダンスホールの営業禁止令を出したため、神戸や阪神国道筋にダンスホールが新設された。

昭和3年、コロンビア、ビクターのレコード会社が、東京でジャズ・レコードの制作を始めた。このため、井田一郎を含む関西のジャズマンたちは次々と上京し、関西のジャズ時代は終わりを告げることになる。その中で、東京生まれの村上一徳率いるハワイアンスタイルのジャズバンド「サザン・クロス・カレッジアンズ」が西下し、神戸に移り住んで、NHKラジオ番組などで活躍し、戦後のジャズ発展への架け橋となった。第2次大戦後のジャズは、進駐軍放送の「センチメンタル・ジャーニー」に始まる。米軍が進駐してきて、神戸をはじめ、甲子園、伊丹、姫路にキャンプが張られた。

日本のジャズバンドもかり出されたが、一般人が生の演奏を聴くには三宮をはじめ各地で復活したダンスホールやキャバレーへ行くしかなかった。全国でもダンスホールが再開・開業し、ダンス全盛時代を迎えたのである。しかし、昭和20年代後半になると、ダンスブームも急速に退潮し、踊るジャズから聴くジャズへと変わっていった(「兵庫県大百科事典」1983)。

昭和27年、神戸に民間放送の「ラジオ神戸(現ラジオ関西)」が開局した。音楽番組は「ミュージック・ステーション」として、末廣光夫<sup>注40</sup> 所有のジャズ・レコードや藤田男爵<sup>注41</sup> 所有のクラシックレコードの放送で始まった。また、民放初の番組として有名な「ラジ関電リク」は、クリスマスイヴの12月25日午前1時～5時に「クリスマス・テレフォン・リクエスト」としてスタートした。日本で初めて電話によるリクエスト形式のこの番組は、大きな反響を呼んで日本のラジオ界に新風を吹き込み、今も「伝説の電話リクエスト」という名を残している(元ラジオ関西アナウンサー・三浦紘朗)。

「ジャズ喫茶」は日本独自の文化である。欧米のカフェでジャズだけを聴かせる店はまずない。神戸に初めてジャズ喫茶「ジャズ」が誕生したのは新開地で、昭和7年であった(三宮ジャズバー「へ



写真 4-1 明治時代のオリエンタルホテル  
(「神戸の150年写真アルバム」 樹林社)

期間	名称	場所
大正13年—昭和15年	ソシアル・ダンスホール	神戸区三宮
大正13年—昭和5年	エンパイア・ダンスホール	中央区海岸通
昭和2年—昭和15年	ダイヤ・ダンスホール	神戸区浪花町
昭和2年—昭和15年	尼ヶ崎・ダンスホール	尼ヶ崎市昭和通り
昭和2年—昭和15年	ガーデン・ダンスホール	西ノ宮市津門
昭和3年—昭和9年	キャピトル・ダンスホール	神戸区三宮
昭和4年—昭和15年	キング・ダンスホール	尼ヶ崎市一ノ坪
昭和4年—昭和8年	杭瀬・ダンスホール	尼ヶ崎市杭瀬
昭和4年—昭和15年	タイガー・ダンスホール	尼ヶ崎市杭瀬
昭和5年—昭和15年	パレス・ダンスホール	尼ヶ崎市東長洲
昭和5年—昭和11年	宝塚会館	武庫郡
昭和6年—昭和15年	西宮・ダンスホール	西宮市神楽町
昭和6年—昭和15年	花隈・ダンスホール	神戸区

表 4-1 戦前の神戸・阪神間ダンスホール(大森盛太郎「日本の洋楽」)

ンリー」石井順子：石井の両親が開業・経営した)。ちなみに、日本初のジャズ喫茶は、昭和4年に開業した東京本郷の「ブラックバード」及び、新宿の「デュエット」で、現存する最古のジャズ喫茶は、昭和8年に開業した横浜野毛の「ちぐさ」<sup>注42</sup>である(後藤雅洋「ジャズ喫茶・リアルストーリー」)。

吉田衛がオープンした「ちぐさ」は、多くのジャズファンや若いジャズマンの溜まり場で、秋吉敏子、渡辺貞夫、日野皓正、原信夫等が当時は貴重なジャズ・レコードを聴き漁った。平成19年(2007)、地域再開発計画により閉店したが、地域住民や常連客らの再建活動によって、平成24年、一般社団法人「ジャズ喫茶ちぐさ・吉田衛記念館」を再建した。カフェ・バーの営業、アーカイブ作業、ライブやイベントの開催などで野毛商店街の活性化に貢献している。また、優れた新人を発掘するための「ちぐさ賞」(今年で5回目)を制定し、コンペティションの優賞者には「ちぐさレコード・レーベル」から記念レコードを出版している。「ちぐさ」は、このような活動を継続しながら、横浜に日本最大のジャズ・ミュージアムの建設を目指している(吉田衛「横浜ジャズ物語」1985、藤澤智晴・ちぐさ代表理事)。

昭和28年には、サッチモが初来日し、新開地の聚楽館でも演奏会が行われた。この時、関西学院大の学生だった右近雅夫<sup>注43</sup>が吹き込んだTIN ROOF BLUESを楽屋に持ち込んで、サッチモに聞かせたところ、右近に抱き着いて殊の外喜んで彼を称賛したという(1956年ROCKWELL 油井正一ノート)。今でも神戸はデキシード・ジャズが盛んであるが、サッチモの演奏が神戸を中心としたデキシードブームに拍車をかけたといつてよい。

同じ年に、現存する神戸最古のジャズ喫茶「JAVA」が三宮に開業した。その後、「バンビ」「コペン」「木馬」「さりげなく」「Jam Jam」「M&M」「萬屋宗兵衛」「Just in Time」など多くのジャズ喫茶が誕生した。昭和40年代の神戸のクラブには、「北野クラブ」「ナイトアンドデイ」「青い城」「ムーンライト」などがあり、キャバレーでは、「紅馬車」「新世紀」「チャイナタウン」「夜間飛行」などがあった。昭和44年には、神戸で最初のジャズライブ&レストラン「ソネ」が北野坂で開業した。毎日ライブが行われ、現在も神戸のジャズ文化の拠点となっている。また、「ヘンリー」「Day by Day」「エリース」などのジャズバー(ライブハウス)が開店し、定期的にジャズライブが行われている。

神戸によく来ていたジャズ・ミュージシャンには、中村八大(ピアノ)、小野満(ベース)、ジョージ川口(ドラム)、渡辺貞夫(アルトサクソ)、日野皓正(トランペット)などがいた。

### ① ジャパン・スチューデント・ジャズ・フェスティバル

経済の発展と共に、企業ではブラスバンドが作られ、バンド合戦なども行われていた。昭和47年(1972)、神戸村野工業高校で教鞭をとっていた日下雄介<sup>注44</sup>は、高校初のジャズバンドを結成した。市内のイベント参加や課外活動をおこない、外国クラブ主催のダンスパーティで演奏をしたこともあった。また、神戸市主催のジャズコンテストでグランプリを獲得したりした。

昭和60年(1985)、日下は本格的に学校のクラブ活動にジャズを導入し、その普及を図ることを目的に、「日本学校ジャズ教育協会」(JAJE: Japan Association of Jazz Education) 関西支部設立に尽力した。同じ年に、大阪フェスティバルホールで第1回「スチューデント・ジャズ・フェスティバル」が開催された。平成5年(1993)の第9回からは神戸市のイベントとして行われている。現在は、「ジャパン・スチューデント・ジャズ・フェスティバル」と改名し、毎年、全国から2,000人以上の学生たちが神戸文化ホールに集まっている(日下雄介「神戸とジャズ」『神戸山手大学・特別講座』2010)。

## ② 神戸ジャズ・ストリート (KOBE JAZZ STREET)

昭和 56 年 (1981) 8 月、神戸ポートピア博覧会が開催され、そこで「インターナショナル・ジャズ・フェスティバル」が行われた。4 万人もの観客を導入し大成功を収めたので、末廣光夫を実行委員長として、北野坂を中心に“同時多発型”のジャズ・イベントを計画した。1930 年代の New York 52 番街一帯ではジャズの店が集中しており、ジャズを聴きに行くことを「ストリートへ行こう」と言っていたことから、「KOBE JAZZ STREET」と命名した。昭和 57 年 10 月、第 1 回の「KOBE JAZZ STREET」が開催された。北野界限 10 数か所のライブハウスや教会などに自由に出入りできる「共通入場券 (ワッペン)」で好きなプログラムを聴ける“はしごジャズ”である。単なる街おこしではなく、伝統のジャズを再現し、純粋にジャズを楽しむことを目指したイベントとして親しまれている。毎年 10 月初旬の土日の二日間に渡って開催されており、今年で 36 回目を迎える。今では、全国各地でこれを模倣したフェスティバルが開催されているが、原点は「KOBE JAZZ STREET」である。前夜祭は、「JAZZ NIGHT SPECIAL」と称して、3 時間を超える演奏が食事付きで楽しめる。全国からジャズファンが訪れ、海外や全国から参加するミュージシャンとのツーショット写真も可能である。このストリート (北野坂) の石畳の歩道には、“KOBE JAZZ STREET”のプレートが 8 枚はめ込まれ、ジャズ・ストリートの本家本元であることを示している (神戸ジャズ・ストリート実行委員会「KOBE JAZZ STREET」2011)。



写真 4-2 March in Parade  
(2017 年 10 月「執筆者撮影」)



写真 4-3 歩道のプレート  
(2017 年 10 月「執筆者撮影」)

## ③ NABL コンサート

NABL (西日本アマチュア・ビッグバンド連絡会) は、西日本 (滋賀県～広島県、四国) で活動する社会人ビッグバンドの会員 (現在 18 団体) 相互の技術の向上と親睦を深めるために、昭和 56 年 (1981) に、神戸国際交流会館メインホールで第 1 回の NABL コンサートを開催した。神戸で最も古いジャズ・イベントで、今年で 37 回目を迎える。

## ④ その他、主なジャズ・イベント

平成 11 年 (1999) に、ジャズ・ヴォーカルを志している女性たちのジャズ・コンペティション「神戸新開地ジャズ・ヴォーカル・クイーン・コンテスト」が開催された。新開地街づくり NPO (代表: 高四代) が神戸市の協力を得て、街の活性化を図ることを目的に、新開地音楽祭と共に立ち上げた。日本全国の地方大会優勝者の中から、素晴らしい女性シンガーが毎年発掘されている。コンテストの優勝者は、アメリカ西海岸シアトルの一流ジャズクラブ「Jazz Alley (ジャズ・アレー) 注 45」に招待され、高い評価を得て世界へ羽ばたいている。

平成 17 年 (2005)、KOBE JAZZ FESTIVAL (神戸ジャズ・フェスティバル) が、震災で被災した神戸国際会館の震災復興記念事業として「新しい神戸ジャズを発信する」ことを目指して開催された。小曾根實注 46、小曾根真ら神戸出身のミュージシャンによるスタンダード・ジャズ主体のコンサートとして、毎年盛大に開催されている。

同じく平成 17 年に、NHK 神戸放送局が毎週金曜日の「ニュース KOBE 発」の中で、「ジャズライブ KOBE」をスタートさせた。関西で活躍するジャズ・ミュージシャンによる生ライブが放送され、視聴者はスタジオで放送前後のミニライブも無料で楽しめる。ニュース番組の中でジャズの生ライブを放送しているのは、全国的に見ても神戸だけである。

平成 27 年(2015)4 月 4 日に、「神戸ジャズ・デイ」が神戸文化ホールで開催された。神戸は日本におけるジャズ音楽の発祥の地と言われ、また日本初のプロのジャズ音楽家による公演が大正 12 年(1923) 4 月に行われたことから、ジャズ文化の発信拠点である神戸を広くアピールすることを目指した。また、イベントを 4 月 4 日(次年度からは 4 月第 1 日曜日)に制定した理由は、ジャズが 4 ビート(4 分の 4 拍子)の演奏が多いことからである。

注

40. 末廣光夫(1929 年 - 2012 年)：東京都出身音楽評論家。ジャズへの造詣が脳裏から離れず、開局したばかりのラジオ神戸(現・ラジオ関西)で音楽評論家として番組に出演していた油井正一からの推薦で、ラジオ神戸に入社。日本で初となる電話リクエストの成功に貢献した。ジャズ番組「ホットジャズライン」などのディスクジョッキーや、ジャズ音楽の評論、また毎年秋に行われる「神戸ジャズ・ストリート」の企画・運営に初回から携わった。
41. 藤田傳三郎(1841 年 - 1912 年)、日本の実業家。明治時代の大阪財界の重鎮で、藤田財閥の創業者である。建設・土木、鉱山、電鉄、電力開発、金融、紡績、新聞、などの経営を手がけた。藤田組の創始者。男爵(民間人で初めて)。現在の山口県萩市出身。
42. 吉田衛により 1933 年に開業し、当時 6,000 枚のレコードを有した。空襲で焼失するも、戦後、米兵向けレコードを収集し再開した。(瀬川昌久「日本のジャズは横浜から始まった」2015)
43. 右近雅夫：1931 年神戸生まれ。関学軽音楽部トランペッター。「Old Dixieland Heart Warmers」で活躍。1955 年に惜しまれてブラジルへ移住。世界ジャズ人名事典に記載あり。
44. 日下雄介：元私立村野工業高校教諭。現在も自らのバンド「モダンタイムス・ビッグバンド」でサクソプレイヤーとして活躍。JAJE(日本学校ジャズ教育協会関西本部)の代表理事。学校におけるジャズ教育の普及にも多大な貢献をしている。2002 年には兵庫県文化功労賞、2005 年には神戸市文化活動功労賞を受賞。
45. Jazz Alley：全米でもトップクラス、地元シアトルでは常に No.1 のジャズクラブ。アメリカはもちろん、世界各地で活躍するトップ・ジャズ・ミュージシャンのライブを、シアトルならではの食事や酒と共に楽しめる。
46. 小曾根實：1934 年、神戸市須磨区生まれ、祖父は阪神電鉄社長、父が阪神内燃機社長という恵まれた環境で、小学生からピアノを弾いた。関西大を出て、テレビ「11PM」に 9 年間出演、サンテレビやラジ関西でも活躍した。今でも現役で活動中の神戸を代表するジャズピアニスト。長男の真は世界的に有名なジャズピアニスト。

## (2) 海外とのジャズ交流

2005 年 8 月、米国ニューオーリンズ市を襲ったハリケーン・カトリーナは甚大な被害を与えた。その復興支援をするために国際協力基金日米センター(CGP)は、神戸の震災復興の教訓と経験がニューオーリンズで活用されることを目的に、研究者や神戸の復興にかかわった人々との連帯交流を図ろうと、日米それぞれで交流事業を開催した。その交流の場で、「復興事業だけにとどまらず、ニューオーリンズと神戸の共通の伝統的文化であるジャズの交流も重要である。」ということが共有された。2008 年 3 月に神戸から復興状況の視察を兼ねてニューオーリンズでジャズ交流についての意見交換を行い、ジャズ交流の実現に努力することで合意した。ジャズの発祥地ニューオーリンズと神戸が共に大きな災害をきっかけに、ジャズによる文化交流の必要性を再認識したのであった。帰国後 4 月に、「神戸とニューオーリンズのジャズ交流実行委員会(池田寔彦委員長)」が発足した。CGP からの助成金を得て、2008 年 10 月、ニューオーリンズから若手ミュージシャンを含む 5 名が参加し、下記の交流イベントを 4 日間にわたって実施した。



写真 4-4 神戸新聞 2017 年 5 月 23 日

- a)ネクスト・コンベンションでの演奏とルイ・アームストロング賞の授与
- b)鷹取地区での住民との復興経験交流及びジャズと食文化の交流
- c)六甲道地区でのジャズによる復興まちづくりパネルディスカッション
- d)甲陽音楽学院ホールでの交流(ジャズ共演)

特筆すべきは、この時、ニューオーリンズ側の協力を得て、神戸にジャズ・ミュージアムを計画しようと、構想予定地(カルメニ)を視察し、神戸新聞社を含む関係者と懇親会が持たれたことであった。しかしながら、博物館計画は資金の問題で実施には至らなかった。その後、兵庫県の「まちのにぎわいづくり一括助成事業」として、2009年にニューオーリンズの若手ジャズ・ミュージシャンを神戸に招待し、2010年には神戸から若手ジャズ・ミュージシャンをニューオーリンズへ派遣するなどの交流を行った。神戸からのメンバーはジャズの次世代を担う才能発掘を目的とした「神戸ネクスト・コンベンション」の入賞者を中心に選ばれた。本交流会は2年間継続したが、現在は行われていない(太田敏一 講演「神戸とニューオーリンズのジャズ交流活動報告」2017.5.11)。

### (3) 他都市のジャズ・イベント

フィールドワークとして、日本の主な都市の代表的なジャズ・イベントに参加した。

#### ① 高槻ジャズ・ストリート (5月4日)

1999年、高槻市の活性化を目的に、「高槻ジャズ・ストリート」が開催された。毎年5月の連休に行われ、今年で19回目を迎える。会場は63か所と街全体で広く行われ、家族づれを含めてあらゆる年齢層が参加し、来場者は10万人以上と言われている。音楽ジャンルは幅広く、ロック以外は許容され、型くるしさは無く、活気に溢れている。市民主体のボランティアによる手作り感のあるフェスティバルである。高槻は地理的に大阪、京都の中間に位置し、特に若い人を取り込み易い。

#### ② 東京ジャズ・フェスティバル (9月2~3日)

2002年から毎年開催され、良質な都市型音楽フェスティバルとして高い評価を得ている。今年で16回目を迎え、会場を丸の内から渋谷に移し、「街ぐるみ」のイベントを目指している。ホール形式のコンサート(NHKホールでは多数の有名なジャズ・ミュージシャンによる大コンサートが実施された)はもちろん、並木道や路上、公園、駅など



写真 4-5 東京ジャズパレード  
(2017年9月「執筆者撮影」)



写真 4-6 NHKホール・コンサート  
(2017年10月8日NHK TV放送)

全9ヶ所の様々な空間で演奏者も観衆も年代を問わず、思い思いのスタイルでジャズを楽しんでいる。並木道でのステージ前では、子どもや犬を連れて、普段の散歩スタイルそのまま楽しんでいる。また、外国人と日本人が何の違和感もなく、ごく自然に観客として溶け合っている。さすが東京・国際都市だと改めて納得する。約12万の参加者が楽しみ、その盛況さは年々進化しているようだ。

### ③ 福岡・中洲ジャズ (9月8日)

中洲町連合会と福岡青年会議所がコラボして始めたジャズ・フェスティバルで、今年で9回目を迎える。博多川、那珂川に挟まれた中洲という日本を代表する歓楽街で、飲食店休業の日曜日を外した金～土曜日の二日間で行われる。有名な屋台街の風情あるエリアに無料屋外ステージが9か所作られ、約40のバンドが演奏する。

中洲の飲食業界などが資金、人材を提供する。プログラムの開始は夕方で、歓楽街のネオンも彩をそえ、終了は夜10時を過ぎる。ジャズと、屋台街を含む飲食街で、音楽と美食が堪能できる。大人のフェスティバルといった印象で、観客数は約10万人であるという。

### ④ 仙台・定禅寺ストリート・ジャズ・フェスティバル (9月10日)

創始者の一人である実行委員長の榊原光裕氏は、ピアニスト、作曲家で、バークリー音楽大学を主席で卒業した楽都仙台を支える人物である。今年で27回目を迎える。二日間に渡って、けやき並木の美しい定禅寺通り、勾当台公園を中心に無料屋外ステージが48か所設けられ、約700バンド、5,000人のミュージシャンが参加する日本最大規模のフェスティバルである。テーマは「音楽の星・地球~ここから~」と壮大で、テーマに恥じない洗練された内容と盛り上がり感満載のスケールには圧倒され、大きな感動を感じる。

### ⑤ 横浜ジャズプロムナード (10月7～8日)

市民とミュージシャンが一体となり「街全体をステージに」を合言葉に1993年にスタートした。現在、12万人を超える観客を迎えるまでに成長している。「ジャズの街 ヨコハマ」を国内外にアピールし、街の活性化や集客増にも寄与するフェスティバルと位置付けされている。

横浜市内各地で50超の会場で、プロからアマチュアまで約3,000人、街角ライブには約200組とスケールの大きさに驚かされる。また、ジャズ以外のフェスティバルも同時進行しており、相乗効果が見込まれ、街全体を盛り上げている。

横浜開港記念会館や記念ホール等各会場のプログラムには、どのジャンルのジャズを演奏するかが記され、いろいろな会場で自分のお気に入りのジャズを楽しめるようになっている。

元町ショッピングストリートのパレードはデキシールランド・ジャズであり、おしゃれな初老の夫婦とかトラッドで決めている上品な老紳士とかが満面の笑顔で演奏者の後をパレードしていた。ジャズ好きのハマッ子が楽しんでいる姿は最高に素敵であった。



写真 4-7 定禅寺ストリート・ジャズ・フェス (2017年9月「執筆者撮影」)



写真 4-8 横浜ジャズプロムナード・パレード (2017年9月「執筆者撮影」)

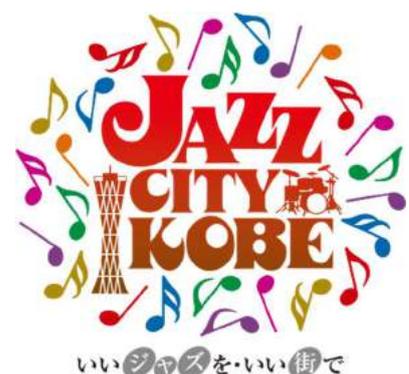


図 4-1 ジャズの街神戸推進協議会ロゴマーク

#### (4) ジャズの街～神戸

神戸を訪れる観光客が、お茶をするために立ち寄ったカフェで、何気なくジャズが流れている。平日のランチタイム、近隣のオフィスから足を運ぶビジネスマンのお目当ては、しゃれたランチと自家製コーヒー、そしてジャズの BGM である。心地よいボリュームのジャズが、ゆったりと過ごしたいカフェタイムにちょうど良い。お洒落なブティックが立ち並ぶ旧居留地や夜景とイルミネーションが魅力のハーバーランドを歩くと、何処からかジャズの音色が風に乗って流れてくる。つい無意識に口ずさみ、スウィングしてしまう。神戸は、日常の中に当たり前のようにジャズがある街なのである。

神戸には、他都市の大規模なジャズ・イベントに比べて、規模は比較的小さいが、ユニークな質の高いイベントが沢山あることが分かった。神戸ジャズの特徴は、先端的なジャズよりも、スタンダード・ジャズをベースとして、演奏者と聴き手が一体となってスウィングし、楽しめるものになっている。新しい曲もたまにはいいが、聞きなれた、懐かしい、誰もが知っている“オールディーズ・ジャズ”は、マンネリと言われるが心が安らぐ。それが神戸スタイルと言ってよい。そして、ほぼ毎月・毎週、日常的にどこかでライブが行われている。

「ジャズの街神戸・推進協議会」は、ジャズ関係者に加えて、民間や行政などの幅広い連携によって、ジャズと神戸の街が一体となった取り組みを進めている。例えば、市内のジャズ・イベント情報網の確立、神戸ジャズの歴史の記録・保存、そして、観光関連企画にジャズ・イベントの参加などが計画・実施されている。

#### (5) 提言

これまでの学習を通して、「神戸はジャズの街」であることを広くアピールする必要があると考え、国際都市神戸の活性化に少しでも貢献できればと、ささやかな提言を行うことにした。

##### 提言①：電車の発車音をジャズに

「A 列車で行こう」のイントロは電車の発車音ピッタリの音である。観光客にジャズの街神戸をアピールし、朝夕の通勤客に元気を与えられるように、JR 三ノ宮駅または新神戸駅の発車音をジャズにするよう、JR 西日本に提案し、検討してもらっている。また、神戸市営地下鉄用にも神戸市交通局へのアプローチを予定している。ちなみに、大阪駅では「やしきたかじん」の「やっぱすきやねん」を流している。

##### 提言②：ジャズ・ミュージアム

ジャズの街神戸に「ジャズ・ミュージアム」が無いのは非常に寂しい。「ジャズの街神戸」のいわれとなった老舗ホテルのバー又はロビーの一角に展示スペースを設け、ミュージアムとする提案である。神戸のジャズの歴史・イベントに関連する写真や資料、神戸ゆかりのジャズマンの使用した楽器等を展示できれば素晴らしい。ちなみに、ニューオーリンズのジャズ・ミュージアムには、サッチモの使用したトランペットが唯一の楽器で、他には、代表的なミュージシャンの写真や歴史に関する資料が展示されている。上海にはミュージアムは無いが、有名な老舗ホテル「和平飯店」のジャズライブが每晚行われるバーの入口に、楽器やパネルが展示されており、ジャズが盛んだった租界時代を想像できる。同じ場所でジャズライブも行えるようにすれば、集客性も向上するし、観光名所にもなる。ジャズが初めて演奏されたと言われている旧居留地の「神戸オリエンタルホテル」に提案する予定である。また、現在、神戸の玄関口である三宮地区再開発の整備が進められているが、そのどこかに、ジャズ・ミュージアムを設置すれば、観光客誘致にもつながると考える。

## 5. おわりに

我々はこれまで、「ジャズ発祥の背景と誕生」「日本のジャズ史」そして「神戸ジャズ」について調査し学んできた。フィールドワークやイベントに参加することによって、これまで以上に、ジャズのすばらしさを知ることができた。今回の学習から、多くの成果を得ることができたが、以下の4点を特記する。

- ① ジャズの歴史を学ぶ過程で、居留地など開港にかかわる歴史も知ることができ、神戸への愛着が一層深まった。
- ② ジャズ・イベントが、地域の人々や街の活性化に大きく寄与し、感動的な経験となることを、身をもって実感できた。
- ③ ジャズの歴史を調べ、「ジャズ年表」としてまとめることができた。
- ④ 共に学習したグループ仲間との友情と絆を確かめ合えた。

ジャズが生まれて100余年、人の心の移り変わりとともに、ジャズも変化してきたが、ジャズの魅力は変わらない。ジャズは、喜怒哀楽を共にする生涯の友である。我々は、これからもジャズを愛し、大いに楽しむことで、神戸ジャズのレジェンドを大切に守っていくつもりである。

最後に、この学習に当たって、ご指導・ご協力いただいた以下の方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。(敬称略、順不同)

神戸大学名誉教授：岩井正浩

「ジャズの街～神戸」編集長・ジャズエッセイスト：安田英俊

神戸市役所 OB・防災科学技術研究所研究員：太田敏一

松江市役所国際観光課：有馬智雄

ニューオーリンズ在住・Photo Journalist、Tour Guide：John McCusker

ニューオーリンズ在住・翻訳通訳：真野ユミ

ニューオーリンズ在住・トロンボーン奏者：菊地ハルカ

ラジオ関西 OB：三浦紘朗

新開地街づくり協議会代表：高四代

TBS OB・横浜在住：勝島孝

横浜「ちぐさ」代表理事：藤澤智晴

神戸文化振興財団・ジャズの街神戸推進協議会事務局

プロフェッサー：楠本利夫

共に学び、ジャズをこよなく愛した

故 山下邦彦に、哀悼の意を表す。

2017年12月 につちもサッチモ

資料① ジャズ年表

西暦	和暦	USA、欧州、東南アジア	日本
1803		ニューオーリンズ(N.O.):仏から米に売却	
1848		上海、アメリカ租界設置	
1853	嘉永6	N.O. 黄熱病大流行、葬式バンド全盛	ペリー来航(横浜)
1859	安政6		横浜開港
1865		南北戦争終了、奴隷制度廃止	
1868	慶應3		神戸開港、居留地開設
1871	明3	上海租界へ日本が参入(居留地)	神戸レガッタ・アスレティック・クラブ(KRAC)結成
1877		N.O. Buddy Bolden 生まれる	
1883	明16		鹿鳴館スタート
1885		N.O. King Oliver 生まれる	
1886		N.O. Kid Ory 生まれる	
1890	明23	N.O. Jelly Roll Morton 生まれる	波多野福太郎、芝中門前で生まれる(明44東洋音楽学校卒)
1894	明27		井田一郎、浅草で生まれる(明42三越少年音楽隊設立入団一期生)
1897		N.O. Storyville設置。ラグタイム急速に発展。	
1898		アメリカによるフィリピンの統治始める	上海の日本租界設置要求、共同租界に留まる
		N.O. Sidney Bechet 生まれる	
1900		N.O. Buddy Bolden“ジャズ”を初めて演奏する	
1901		N.O. Louis Armstrong (サッチモ)生まれる	
1910		米キャッスル夫妻ジャズを伴奏にフォックストロット・ダンス発表	
1912	明45	フォックストロット(ダンスステップ)全米に普及	波多野福太郎、東洋汽船・地洋丸・楽団員で北米航路 (波多野バンドは8年間乗船)
1915		ラグタイム、ダンス音楽としてレコーディング	
1916	大5	Sidney Bechet欧州へ シカゴで“JAZZ”という言葉が誕生する	波多野福太郎、米でフォックストロット・ダンス楽譜を買い下船、 銀座活動写真館「金春館」で伴奏・休憩演奏(ジャズではない)
1917	大6	J.R.Mortonロサンゼルスへ移住 N.O. Storyville廃止。	横浜「花月園」社交場・オープン。前野港造、春洋丸乗船 井田一郎、日本郵船・鹿島丸から下船、楽器・楽譜持帰る
		ODJBニューヨークで初めて“JAZZ”をレコーディング	東京や横浜(花月園等)でフォックストロット等のダンス音楽を演奏
1918	大7	King Oliverカリフォルニアへ 第1次世界大戦終了	井田一郎、東洋汽船・天洋丸で北米航路(～1921) サンフランシスコでダンス音楽のレッスン受ける
1919	大8	Kid Oryカリフォルニアへ移住	波多野鏗次郎下船、ハタノオーケストラとして「金春館」で演奏 P.アントニオ(フィリピン楽団)、神戸オリエンタルホテルでジャズ演奏
1920	大9	禁酒法施行	慶大生菊池滋弥、ワシントンからジャズレコード持帰る 銀座の社交クラブ・交詢社で再生(ジャズ喫茶の始まり) 加州大学「グリークラブ・ジャズバンド」大阪中央公会堂でジャズ演奏 横浜鶴見に日本初の営業ダンスホール「花月園」開業
1921	大10		井田一郎下船、ジャズ楽譜持帰る、「花月園」(初代央倉バンド)で演奏 ハタノオーケストラ、「花月園」(2代目バンド)で演奏(ジャズではない)
1922	大11	King OliverがLouis Armstrongをシカゴへ呼ぶ	井田一郎、3月宝塚オーケストラ入団、12月幕間にジャズ演奏
1923	大12	J.R.Mortonシカゴへ	井田一郎、3月退団、4月初のプロジャズバンド「ラフティング・スターズ」 結成、神戸オリエンタルホテル等でジャズ演奏(春～夏) 関東大震災(9月) 井田バンド解散後鹿島丸で再渡米
1924	大13		大阪「パウリスタ」喫茶からダンスホールに転業 井田一郎、「パウリスタ」出演、大阪で活躍(～昭和4)
1925	大14	Kid Oryシカゴへ	法大、「ラック&サン・ジャズバンド」結成(大学初) 井田一郎、大阪で「チェリーランド・ジャズバンド」結成 JOAK・NHK「コペンハーゲン・ジャズ」演奏・放送6.19 松旭齋天勝、東京帝劇6.26や横浜喜楽座7.1でジャズ演奏
1927	昭2		慶大菊池滋弥、「レッド&ブルー・ジャズバンド」結成 大阪ダンスホール営業禁止令
1928	昭3		井田一郎、東京へ、バンド演奏・作曲・編曲・指揮で活躍
1929	昭4		日本初のジャズ喫茶「デュエット」「ブラックバード」東京に開業
1930	昭5		阪神国道沿いにダンスホール林立
1932	昭7		神戸新開地にジャズ喫茶「ジャズ」開業
1933	昭8	禁酒法廃止	ジャズ喫茶「ちぐさ」横浜野毛に開業(現存)
1938	昭13	ベニー・グッドマン、カーネギーホール出演	
1940	昭15		全国でダンスホール閉鎖令施行
1947	昭22		全国でダンスホール再開・開業相次ぐ
1953	昭28		神戸三宮、ジャズ喫茶「JAVA」開業(現存) 日本初のジャズライブハウス「テネシー」西銀座にオープン サッチモ初来日、神戸新開地の聚楽館でも演奏
1954	昭29	ニューポート・ジャズフェスティバル始まる	
1969	昭44		神戸北野坂、ジャズレストラン・ソネ開業(現存)
1971	昭47		神戸、村野工、日本初の高校ジャズバンド結成、日下雄介
1977	昭52		日本初ジャズフェス「ライブアンダーザスカイ」田園コロシウムで開催
1981	昭56		神戸、「インターナショナルジャズフェス」開催、ポートアイランド 神戸、第1回NABL(西日本アマチュア・ビッグバンド連絡会)コンサート
1982	昭57		「神戸・ジャズ・ストリート」スタート

資料② フィールドワーク一覧表

実施日	場所	学習内容
2017年2月	Great Blue、ソネ	ジャズライブ
3月20日	ジャズライブレストラン・ソネ	ジャズライブ
4月2日	神戸文化ホール 神戸ジャズディ 2017	ジャズイベント
5月4日	高槻ジャズ・ストリート	ジャズイベント
5月11日	太田敏一・神戸市役所OB講演 KSCへ招聘	テーマ「神戸とニューオリンズとの交流」
5月13日	第17回神戸新開地音楽祭	ジャズイベント
5月13日	神戸新開地 ジャズ・ヴォーカル・クイーン・コンテスト	ジャズイベント
5月21日	KOBE JAZZ WALK 2017 ハーバーランド	ジャズイベント
5月25~30日	米国・ニューオリンズ	ジャズの歴史と現状の調査・学習
6月7日	神戸文書館	神戸ジャズ史の調査
6月28日	ジャズバー「ヘンリー」石井オーナー	神戸のジャズの思い、ジャズライブ
7月7日	神戸文書館	神戸ジャズ史の調査
7月20日	岩井正浩・神戸大学名誉教授 KSCへ招聘	テーマ「ジャズとは何か」
7月25日	MOKUBA TARVAN	ジャズ喫茶
7月28日	The TRIO in Kobe,k-wave	ジャズライブ
7月30日	第3回神戸港ラテンアメリカ・カーニバル ハーバーランド	ジャズライブ
8月23日	ジャズ喫茶 JAVA	神戸最古のジャズ喫茶
8月25日	KIITO神戸 岩井正浩・神戸大学名誉教授招聘	テーマ「ジャズのジャンルと歴史」
9月1~3日	東京・TOKYO JAZZ FESTIVAL	ジャズイベント現地調査
9月8日	福岡・中州ジャズ	ジャズイベント現地調査
9月9日	ジャズバー Day by Day	ジャズライブ
9月10日	仙台・定禅寺ストリート ジャズフェスティバル	ジャズイベント現地調査
9月11日	新開地街づくり協議会代表 高四代	神戸ジャズについて
9月12日	名谷 三浦紘朗 ラジオ関西OB	神戸ジャズ、ラジオ放送について
9月15日	横浜 ジャズ喫茶ちぐさ 藤澤代表理事	ちぐさ再建、活動と横浜ジャズ事情調査
9月16日	横浜開港資料館、横浜市立図書館	ジャズ上陸の調査
9月27日	ジャズバー Ellie's	ジャズライブ
10月4日	ジャズバー Day by Day	ジャズライブ
10月7~8日	横浜・ジャズプロムナード	ジャズイベント現地調査
10月8日	第36回神戸ジャズストリート	ジャズイベント
10月16~19日	中国・上海	上海ジャズの歴史とジャズライブ
11月1日	ジャズバー Day by Day	神戸市民文化振興財団との面談
11月9日	神戸市民文化振興財団	神戸ジャズについて
11月16~17日	篠山合宿	発表会準備・プレリハーサル

## 参考文献

- 相倉久人『ジャズの歴史』新潮社、2007  
沢田俊裕『ジャズのすべて』日本文芸社、2007  
油井正一『ジャズの歴史物語』ARTES、2009  
相倉久人『ジャズ史夜話』ARTES、2013  
富沢えいち『ジャズを読む事典』日本放送出版協会、2004  
中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』岩波書店、1999  
中村とうよう『アメリカン・ミュージック再発見』北沢図書出版、1996  
John McCusker『The Cradle of Jazz Tour』2017  
本多俊夫『ジャズ JAZZ』新日本出版社、1979  
油井正一『生きているジャズ史』立東社、2016  
岩波洋三『これがジャズ史だ』塑北社、2008  
外山喜雄『聖者が街にやってくる』冬樹社、1982  
内田晃一『日本のジャズ史』スウィングジャーナル社、1976  
相倉久人『至高の日本ジャズ全史』集英社、2012  
油井正一・行方均『ジャズ昭和史』DU BOOKS、2013  
マイク・モラスキー『戦後日本のジャズ文化』青土社、2005  
中山康樹『証言で綴る日本のジャズ 1&2』駒草出版、2016  
瀬川昌久・大谷能生『日本ジャズの誕生』青土社、2009  
瀬川昌久『ジャズで踊って』清流出版、2005  
永井良和『社交ダンスと日本人』品文社、1991  
朝日新聞社『大阪朝日新聞』大正9年8月3日  
日本経営史研究所『日本郵船株式会社百年史』日本郵船株式会社、1988  
斎藤燐『昭和のバンスキンたち』ミュージック・マガジン、1983  
大森盛太郎『日本の洋楽』新門出版社、1986  
榎本泰子『楽人の都・上海』研文出版、1998  
榎本泰子『上海』中央新書、2009  
後藤雅洋『ジャズ喫茶・リアルストーリー』河出書房、2008  
武石みどり「ハタノ・オーケストラの実績と功績」『お茶の水音楽論集』お茶の水大学、2006  
津金沢聡彦『タカラズカ・ベルエポックⅡ』神戸新聞出版センター、2001  
呉宏明『こうべ異国文化ものしり事典』神戸新聞出版センター、2006  
神戸新聞出版センター『兵庫県大百科事典』1983  
五洲社『神戸又新日報』大正1年～15年  
堀博・小出石史郎共訳『神戸外国人居留地』ジャパン・クロニクル社、1993  
のじぎく文庫『神戸新聞地物語』のじぎく文庫、1973  
神戸ジャズストリート実行委員会『KOBE JAZZ STREET』2011  
太田敏一「神戸とニューオーリンズのジャズ交流活動報告」『神戸市都市政策』2009  
日下雄介「神戸とジャズ」『神戸山手大学・特別講座』2010  
谷岡史絵「神戸居留地における音楽」『神戸大学発達科学部研究紀要』第9巻第1号、2001  
土井晴夫『神戸居留地史話』リーブル出版、2007  
瀬川昌久『日本のジャズは横浜から始まった』ちぐさ、2015  
吉田衛『横浜ジャズ物語』神奈川新聞社、1985  
斎藤龍『横浜大正洋楽ロマン』丸善ライブラリー、1991  
斎藤龍『横浜貿易新報大正年間音楽記事集録』神奈川新聞社、1989  
斎藤龍『横浜貿易新報大正年間音楽記事集録・図録』神奈川新聞社、1989  
横浜貿易新報社『横浜貿易新報』大正4年～15年  
横浜開港資料館『横浜もののはじめ考・第3版』2010  
斎藤美枝『鶴見花月園秘話』鶴見区文化協会、2007  
斎藤龍『横浜と音楽』横浜市教育委員会、1986



*JAZZ*

